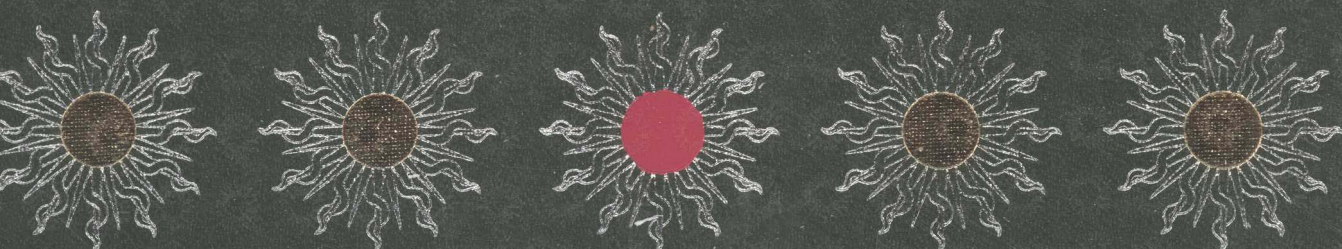

JAPONICA



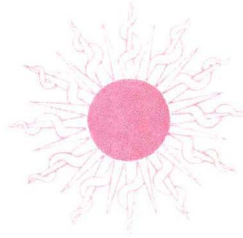
3



ENCYCLOPEDIA
JAPONICA



大日本百科事典



3

SHOGAKUKAN

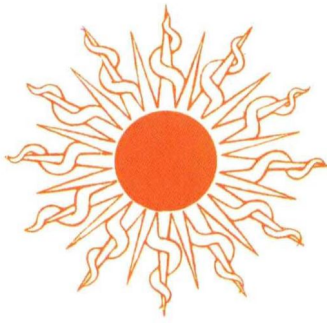


ジャポニカ - 3

製	表紙用 特製色箔	特抄 クロス	特抄 アート紙	特抄 コート紙	印刷
本	独逸顔料工業株式会社	ダイニツク株式会社	三菱製紙株式会社	王子製紙株式会社	凸版印刷株式会社
凸版印刷株式会社					

Printed in Japan

ウウウ
ウウウ



ううう
ううう

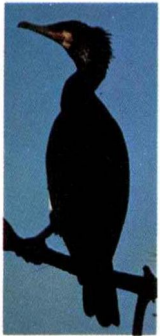
喜多川歌麿 書

う 五十音図ア行・ワ行の第三音で母音の一つ。音声記号は「u」または「w」。ひらがな「う」は「字」の草書体、かたかな「ウ」は「宇」の冠にもとづく。平安中期には、マ行音に先立つ「ウ」の音が「ム」となり、「うま（馬）」を「むま」、「うめ（梅）」を「むめ」と書くのが一般的であった。蘇村にも「梅咲きぬどれがむめやらうめぢゃやら」という句がある。「う」は現代かなづかいでは、ゆうがた（夕方）・たいよう（太陽）・りょうり（料理）などのように長音の符号としても用いる。

〈畠山義和〉

ウ〔鵜〕 cormorant 鳥類・ウ科の水鳥の総称。古くはシマツドリ（島津鳥）とよんだ。全世界に三二種が生息しているが、このうち日本にはカワウ・ウミウ・ヒメウ・チシマウガラスの四種が知られている。

カワウはその名のとおりおもに淡水域に生息するが、沿岸にも生活している。南アメリカを除くほとんどの地域に分布し、日本では北海道から九州にかけての沿岸部にすむ。このうち繁殖するのは本州だけで、その最北限は青森県南津軽郡尾上町にある猿賀神社の林であったが現在は渡来しない。このほか千葉市大蔵寺の通称「鵜ノ森」、愛知県知多郡美浜町の通称「鵜ノ池」の繁殖地が有名で、天然記念物に指定されている。この種類は春さきから大木の枝上に集団で営巣し三〜六個の白色卵を産む。その数は数千羽に達することがある。留鳥であるが繁殖が終わると漂鳥となり、沿岸部の内湾や淡水湖で生活し、冬になると九州方面に移動するものもある。翼長三三センチくらい。全身の羽毛は青緑色をおびた黒色で、のどから顔にかけて羽毛がなく、黄色の皮膚が露出している。繁殖期にはくびに白毛を生じ、これを「しらがウ」という。また、この時期には下腹側部に大きい白紋を生じる。くちばしは長く七センチ達し、先が鋭く鉤状に曲がっている。あしは腹のやや後方にあつて短く、四本の指のあいだには、よく発達した水かきがあつて泳ぎや潜水がうまい。



ウ〔下〕北海道苫前郡天売島のウミウ
〔左〕愛知県美浜町鵜ノ池のカワウ

食物はおもに魚であるが、三〇センチくらいのものもそのままみ込んでしまうので、「うのみにする」という言葉が生まれた。日本産のもの学名は一九二五年（大正一四）に東京羽田で採集されたものに黒田長礼が命名したものである。

ウミウは、アジア北東部に繁殖し、冬になるとその南部に渡る。日本では北海道・東北地方および日本海沿岸にわずかに繁殖し、その南限は福岡県の沖ノ島であるが、ほとんどのものは千島列島方面から南下してきて越冬する。神奈川県城ヶ島、山口県豊浦郡の壁島には数千羽が渡来する。繁殖は海岸の絶壁に営巣し、四〜五個の淡青色卵を産む。翼長四〇センチくらいで、カワウより大きく、全身の羽毛に青緑色の強い点がカワウと異なる。鵜飼に使用するのは本種で、おもに茨城県高萩市の海岸で捕えて訓練する。漁業上は魚群を散らすので害鳥とされている。

ヒメウは、北太平洋の北部に繁殖し、冬にはその南部の海岸で越冬する。日本では北海道と青森県でわずかに繁殖し、ほとんどのものは冬鳥で、本州中部まで南下する。大きさはその名のとおりカワウより小さく、翼長二六センチくらいで、頭上に二個の羽冠がある。羽色は黒に近い、青緑色をおびる。前種にくらべると数は少ない。



チシマウガラスは、北太平洋の北部沿岸部と諸島に繁殖し、冬はその南部に移動する。日本では北海道の北東部で繁殖するものもあるが、ほとんどは冬鳥として北海道にくる。ヒメウよりやや大きく、額まで皮膚が裸出して赤く、頭上に二個の羽冠がある。羽色はヒメウに似ている。

なお、夏の季語で、「河鵝」「鵝飼」「鵝飼舟」「鵝飼火」「鵝籠」「鵝川」なども同じ。鵝の巖に溝奔流となりて落つ 水原秋桜子

卯 う サギで、十二支の第四番め。昔の時刻の名で、午前五時から午前七時までをさす。午前六時から午前八時までに誤用され、方位としては東をさす。

禹 う 中国、夏王朝の始祖とされる人物。舜のとき中国に大洪水がおこり、鯀が治水に努力したが失敗して処刑されたあとをうけて、その子禹が治水に成功し、その功によって舜から天子の位を譲られたといわれる。禹の勤勉さや質素な暮らしぶりは、戦国時代の墨子によって敬慕された。しかし、このような帝王説話となる前には、鯀は魚、禹は竜のような動物として、神話の世界の中で語られていたらしい。

ウアイオリン □バイオリン
ウアイス □ワイス 霊長目・オマキザル科の哺乳類の総称。南アメリカ産のサル類中、尾が短い唯一の類。南アメリカのアマゾンの森林に分布する。頭胴長四〇～五五センチほど、尾長は体の三分の一以下。尾が短いのは尾椎骨の数が少ないのではなく、おのおのの椎骨が短く退化したためである。顔は裸出し、手足は比較的大きくて長く、指趾は細長い。体毛は長く絹毛状で、色は種類によつていちじるしく異なる。歯式は $\frac{2.1.1.3.3}{2.1.1.3.3}$ で合計三十六本。ふつう旧世界産の尾が短い類は地上生活を

をするものが多いが、ウアカリ類は完全な樹上棲である。河岸の高い梢で小群をつつて生活する。食物は種々の果実で、下顎の牙状をした犬歯と長い門歯を用いて果実をもぎ取ったり、皮をむいたりして食べる。性質は温和で、容易に飼育することができる。次の三種がある。ハゲウアカリ bald uakari

Cacajao calvus は頭胴長四一センチほどで、頭はほとんど裸出し、顔と皮膚は赤く、あごの下に赤色をおびる茶色の毛がある。体と肢は美しい灰白色。ネグロ川とブランコ川の谷に分布するアカウアカリ red uakari/Cacajao rubicundus は頭胴長五一センチ、尾長一八センチほどで、顔と皮膚の色は前種に似ているが、体毛は赤みをおびた金色。ネグロ川北方に分布するクロウアカリ black-headed uakari/Cacajao melanocephalus は、顔の皮膚と頭部および四肢は黒色で、背・体側は黄色をおび、腰・大腿部の外側および尾先端は赤褐色。

ウアフタンゴフ □ワフタンゴフ
ウアルド □ワルド
ヴァレンシユタイン □ワレンシユタイン
ヴァン・ウオクト □バン・ウオクト

有為 うい 仏教の術語。「なされたもの」、すなわち原因と条件との結合から現実にあられた結果の諸現象をいう。サンスクリットのサンスクリタ samskṛta の訳語。有為は現象であるから、原因・条件などの変化に応じて、たえず変化する。すなわち永遠不変のものではない。しかし、それが人間社会・人間生活の実際の姿であると仏教は説く。これを「有為無常」または「有為転変」という術語でよび、「いろは歌」はそれを詠んだものである。有為のおもなものは、物質と、心と、物質も心も消滅したものと三つであるとして、これを三有為と称し、さらにとくに心について、たとえば喜び・怒り・むさぼり・分別・意識その他、ひじょうに細かく分類して、合計七二・九四の有為法を立てている。また右の数に、三無為ないし六無為を合せて、計七五法・一〇〇法の分類法が知られている。なお有為に対するものは「無為」でそれは常住不変の存在をいう。《三枝充恵》

V ヴイ □ヴィ
ウィーンニアフスキー Henryk Wieniawski (ハニエー・ハ) ポーランドのバイオリン奏者・作曲家。一九世紀のもっとも有名なバイオリン奏者の一人。パリ音楽院で学び、のちヨーロッパやアメリカに演奏旅行をおこない名声を高めた。またバテルブルグやブリュッセルの音楽院で教鞭をとった。主要作品は『バイオリン協奏曲』（一番・二番）『モスクワの思い出』『ロシアの謝肉祭』『ボロネーズ』などがある。《国安 洋》
ウィオラ □ビオラ
ウィキキウ (茴香) Foeniculum vulgare Mill. セリ科の宿根性多年草。南ヨーロッパ原産。茎は高さ一・二メートルで叢生する。葉は細かく数回羽状に分かれる複葉で、小葉は糸状となる。花は黄色で小さく、夏に枝の先に複散形花序をつくって咲く。果実は円柱状で長さ八～一〇ミリで、成熟すると二つに割れやすくなる。全草が特異な芳香を放散するが、とくに果実が強い香を放つ。日本では長野県をはじめとして、北海道・岩手・富山の各県で栽培されている。秋に果実(種子)が成熟したころに、全草を根元から刈り取り、たたいて種子を落として集める。それを春にまいて発芽させ、秋に畑に定植すると翌年から毎年開花し結実する。



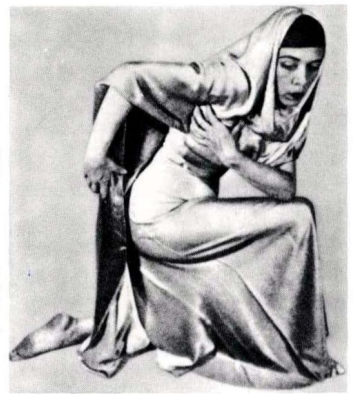
果実を採取して乾燥したものが生薬の茴香で、アネトールを主成分とする精油を含み、芳香健胃剤・駆風剤・去痰剤の原料となる。おもに胃カタル・腹痛の家庭薬として健胃散によく用いられる。常用量は一日二～三グラム。また水蒸気蒸留によって茴香水をつくり薬用とする。薬用のほかにリキユールの香料としたり、スパイスとして種々の料理に用いられる。とくに魚料理やロシア・イスラームによく使われる。またウィキキウの品種で茎の肥大するものをイタリアでは野菜として賞味する。

花は夏の、実は秋の季語。茴香子・茴香・魂香花・呉の花などと呼ばれる。茴香の花の匂いや梅雨曇り 島田青峰
Fennel ⑩ fenouil ⑩ Fenchel
ウィクナル Johan Gustaf Knut Wicksell

(一九五二～一九六三) スウェーデンの経済学者。ストックホルムに生まれ、ウプサラ大学に進み、最初は数学者を志したが、人口問題や社会運動に深い関心を示し、後に経済学に転じた。新マルサス主義の擁護者であり、 Lund 大学教授をつとめ、スウェーデン学派の始祖といわれている。その学風はオーストリア学派やローザンヌ学派の影響を受け、分配における限界生産力説を展開し、資本・利子理論を展開したが、その主たる貢献は、貨幣理論や利子・物価理論における独自の理論にある。それは、貨幣量・利子率・物価水準・所得を関連させる現代マクロ(巨視的)経済学の先駆をなすものとして、高く評価されている。

『価値・資本および地代』(一九六三)・『利子と物価』(一九六九)・『国民経済学講義』(一九三三～一九三九)などの著書がある。《志田 明》
ウィグナー Eugene Paul Wigner (一九〇二～) ハンガリー生まれのアメリカの理論物理学者。ベルリン工科大学を卒業後、同大学に勤務したが、一九三〇年アメリカに移り、プリンストン大学に在籍し、三八年同大学の理論物理学教授となった。第二次世界大戦に際してはシカゴ大学冶金実験所でフェルミらとともに原子力の研究に参画し、原子炉の建設に尽力した。のち同所に移り、また民間会社の顧問などもつとめ、応用面でも活躍している。理論物理学の業績も多方面にわたる。分子原子の理論における群論的取扱、固体論の研究(ウィグナー・ライト・ウィグナーの方法)、核力の反応論(ライト・ウィグナーの理論)、核力(ウィグナー力)、場の理論など数学的方法を駆使したものが多い。《藤村 淳》

ウィグマン Mary Wigram (一八八一～一九三三) ドイツのモダン・ダンサー。ハノーバーの生まれ。ダルクローズ・ラバンに学び、一九二〇年ドレスデンに舞踊学校を開き、三一年ニューヨークに分校を開校した。伝統のパレエとは異なる新しい創造的な舞踊の開拓者の一人で、ドイツやヨーロッパばかりでなく、アメリカにも大きな影響を及ぼした。処女作『魔女の踊り』(一九二五)以下、代表作『春の祭典』(一九二九)など、ソロ・群舞合わせて一〇〇を超える作品を創作している。第二次世界大戦中ナチスに追われたが、四九年、西ベル



ウイグマン 「死への舞踏」の一ポーズ

リンに帰り、五三年ドイツ共和国勲功十字章を受けた。著に『舞踊の言葉』(一九六六)がある。〈光吉夏夢〉

ウィークリー weekly 一般に週刊の新聞・雑誌をさす。現在の日本では、週刊新聞の多くは専門紙または機関紙である。また週刊雑誌は、一九五八年(昭和三十三年)ころからいわゆる「週刊誌ブーム」をよび、急速に増加した。↓新聞 → 週刊誌

〈春原昭彦〉

ウィクリフ John Wycliffe (1328-1384) 英語の先駆的宗教改革者。オックスフォード大学神学教授。国王エドワード三世の宮廷司祭に叙任されると、教皇権からのイギリスの政治的・宗教的独立を説き、信仰と救済に関する最高の権威は聖書にあると確信して教会改革に努めた。聖書の英訳に着手し、教皇の貢税に反対し、とくに教会財産に攻撃を加えた。一三七八年シスマ(教会分裂)を契機にカトリック教義をも批判し、いわゆるローランド(貧乏僧)を各地に送って民衆の間に福音を説き続けた。七九年以後には聖職者の悪徳を責め、教会のサクラメント(秘跡)のうちとくに聖餐説(化体説)を聖書によって批判し、真の福音を説いた百数十編の著述をした。ロンドン司教は再三彼に教会法廷への出頭を命じたが、国王、その子のランカスター公の保護下に活動を続けた。八一年ワット・タイラーの乱が彼の教説にもとづくものとされ、大学や貴族の支持を失い、失意のうちに教授を引退した。しかしその後もラタウズで宣教しその地で没した。一四一五年コンスタンツ宗教会議で異端を宣告され、遺骸は掘

り出され著書とともに焼かれた。一説には遺骸はテムズ川に投げられたともいう。彼の説はのちフスに継承され、フス派の戦争をひきおこした。〈五十嵐久仁平〉

ウイグル Uighur はじめモンゴル高原に、ついでトルキスタンに活躍したトルコ系民族。中国では回紇・回鶻・維吾爾などと写す。バイカル湖の南辺で東突厥に服属していたが、東突厥が八世紀の中ごろ衰えるとこれを滅ぼし(七四四)、以後約一〇〇年間モンゴル高原を支配した。最初の四〇年間は隆盛期で、安史の乱の鎮定に協力して唐に過大の要求をおこない、その内政にも干渉した。それに続く約四〇年間は西方へ発展し、東トルキスタンに進出してきた吐蕃(チベット)やエニセイ川上流域のキルギス族と戦った。しかし、そのうち内乱が続く、ついにキルギス族の攻撃をうけて四散した(八四〇)。モンゴル高原時代のウイグルはマニ教を国教とするなど西方文化を採用するとともに、唐との交渉を通じて中国文化をもとり入れた。その瓦解後、一部は南下したが唐の征討をうけて滅亡した。また別の一部は甘州・肅州方面に定住し、一〇二八年に西夏に併合されるまで独立を保った。しかし、その主力は西方へ移住した。そのうち一部は東部天山山脈北麓のビシバク、南麓のトルファンに拠って、いわゆる西ウイグル王国をたて、東西文化を融合して独特の文化を発展させたが、ジンギスカンに服属し、ついでチャガタイ・カン国の支配をうけた。さらに別の一部は同じくトルコ系のカルルク族と合流し、西部天山山脈北麓にカラハン朝をたて、一〇世紀中ごろにイスラム教に改宗し、イスラム勢力の東漸に大きい役割を果たした。モンゴル高原時代には突厥文字を使っていたが、西方移動後はすでにその地方でおこなわれていたウイグル文字を使用した。このウイグル文字からモンゴル文字、さらに満州文字ができた。また西ウイグル王国では仏教・キリスト教もおこなわれた。ウイグルの西方移動は、それまでアジア系・イラン系民族の住地であった中央アジアをトルコ化し、ここにいわゆる「トルキスタン」(トルコ人の土地)が成立した。今日、中国の新疆ウイグル自治区の住民の大部

分はこのウイグルの子孫である。〈護雅夫〉

安部健夫著『西ウイグル国史の研究』(一九五五) 五・彙文堂書店

ウイグル文字 ーもじ 主として古代ウイグルの使った文字。西トルキスタンのソグド人の用いたソグド文字にならってつくられ、最初は八世紀に西部天山山脈北麓にいたトルコ系のトルギシュ族などに用いられた。ウイグルがこの文字を使用したのは、九世紀中ごろに、東トルキスタンへ移住して以後のことである。四個の母音文字、一四個の子音文字から成る。仏教・マニ教・キリスト教関係の各種文書・經典のほか、法律・契約文書も、この文字でしるされた。一三世紀の初めジンギス・カンによってモンゴル語をあらわすために採用され、さらにこれが土台となって満州文字がつくられた。ウイグルがイスラム教に改宗するにつれて、アラビア文字がこれに代わって用いられるにいたった。〈護雅夫〉

ウィザー Friedrich von Wieser (一八五九-一九二六) オーストリアの経済学者。ウィーンに生まれ、ウィーン大学で法学を学び学位を得たが、のちハイデルベルク・ライプツヒ・イエナの各大学で経済学を修めた。プラハ・ウィーンの各大学教授をつとめ、第一次世界大戦中、商務大臣となったこともある。オーストリア学派の始祖メンガーの後継者として知られ、主観価値説の立場から、価値・費用法則を研究した。晩年には、社会なども興味を示した。『自然価値論』(一九一六)などの著書がある。〈志田 明〉

ウィース Johann Rudolf Wyß (一七六一-一八三〇) スイスの児童文学者。ベルン市に牧師の子として生まれ、ベルン大学の哲学教授や図書館長などをつとめた。牧歌・伝説・物語などをまとめたとして、スイスの文学復興に努力した。父J・ダーフィット・ウィースが自分の子どもたちのために書いた少年少女小説『スイスのロビンソン』を今日の形に仕上げた出版したことで広く知られる。〈関 楠生〉

ウイスキー whisky 蒸留酒の一種。麦芽を主原料としてこれを糖化し、発酵させたのち蒸留してつくった酒。商業上の慣行として、アイランドとアメリカでは whiskey という綴りを用いる。ケルト語ウシク・ペーハー

nighe-beatha (生命の水) が語源で、これがアスキボー usquebaugh、さらにウイスキー whiskey となり、語尾が略されてウイスキーとなった。「生命の水」は本来は錬金術の用語で、ラテン語でアクア・ヴィタエ aqua vitae と書き、九世紀にコルドバの医師がぶどう酒から蒸留した「生命の水」はアルコールであった。のちフランスでは、ぶどう酒を蒸留したブランデーをオーード・ビイ eau-de-vie (生命の水) とよんでいた。

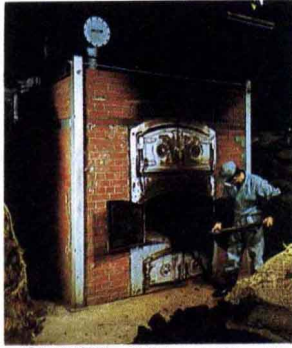
現在のウイスキーが、アイランドではじめてつくられた時代は明らかではないが、イングランドにそれが伝えられたのは一二世紀、またはそれ以前で、スコットランドでも、アイランドとほぼ同じはいやい時代蒸留が始まったとみられる。初期には麦芽(モルト)を原料にしたアルコールに、サフラン・ナツメグその他のスパイスと砂糖で味をつけたもので、ほとんど薬用であった。一六世紀のはじめにスコットランドで商品になったが、一八二三年の税制改革までは、重税のため密造が多く、大規模な蒸留所は少なく、大部分は家庭製であった。一七世紀にはいて、スコットランドの山岳地方で、麦芽の乾燥に泥炭(ピート)を用い、単式の蒸留器(ポット・スチル)で濃厚な味とにおりをもつウイスキーがつくられた。これがスコッチ・ウイスキーの発端である。一八二六年に能率の高い連続蒸留器(パテント・スチル)が発明され、これによって穀類(おもにトウモロコシ)を原料にしたグリーン・ウイスキー brain whisky がつくられはじめた。連続蒸留器はその後改良され、一八三一年に特許をとった。

一九世紀の半ばから貯蔵年数の異なる麦芽ウイスキーを、ブレンド(調合)して味をよくする方法が一般化し、一八六〇年代には麦芽ウイスキーと穀類ウイスキーをブレンドして、輸出に適した味をつくりだすことがふつうになった。八〇年代に、各国のブドウ園がフィロキラの虫害で壊滅したので、ぶどう酒の値段が高騰し、安価なウイスキーが普及するようになった。

アメリカのウイスキーは、イギリスからの移住者(おもにスコットランド人)によって

ウイスキー〈製造工程〉

(協力・サントリー)



④乾燥麦芽 発芽したムギは、ピートを燃やして乾燥させる



③バンデルハウヘン装置 ムギをこの装置の中で約一週間移動させながら発芽させる



②浸麦槽 オオムギと水を攪拌し水分を吸収させて発芽を促す



①原料 原料のオオムギが工場に運びこまれる



⑦ポット=スチル 発酵液は初蒸釜・再蒸釜と二回の蒸留作業をへて、酒精度の高い原酒となる



⑥発酵タンク 糖化液に酵母を加え、この発酵タンクの中で、5〜7日間発酵させる



⑤糖化タンク 乾燥麦芽に熱湯を加え攪拌してでんぷんを麦芽糖に変化させる



⑩ブレンド オートメによる品質の均質化



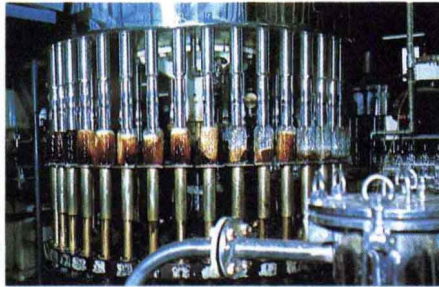
⑨貯蔵 独特の香気は、たるの中で熟成される



⑧たる この工場では北米産のホワイトオークをたるの材に使用。永年の貯蔵に耐えられる



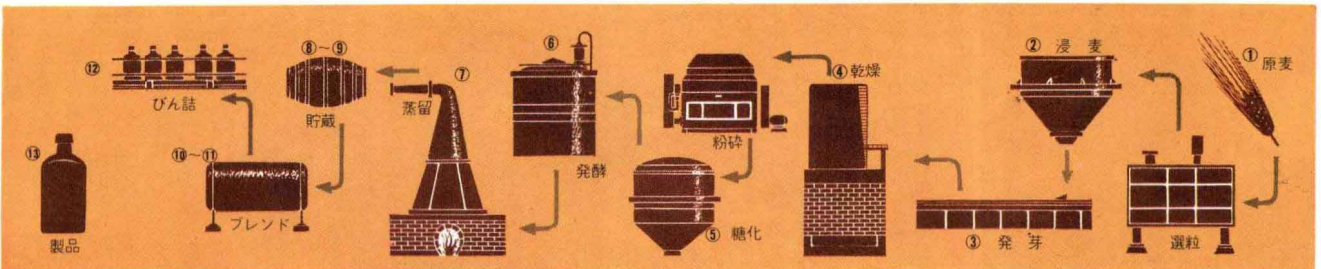
⑬びん詰 長く、また複雑な過程を経てやっとウイスキーが生まれる。レッテルをはり、包装される



⑫びん詰 昔は手詰め、今はオートメーションで毎分150本前後の製品が生まれる



⑪ブレンド 微妙な味とかおりを持つウイスキーの品質の調合は、やはり人間の口の感覚にたよる



始められ、初期にはケンタッキー州バーボン Bourbon 郡で密造されていたので、「バーボンウイスキー」とよばれた。これらはトウモロコシを主原料にしていたので、現在でもトウモロコシを五一%以上含むものにこの名が認められる。

【製法】製法には種々あるが、原則的な例をあげると次のとおりである。粉碎した乾燥麦芽(モルト)に熱湯を加え、五四〜六三度ででんぷんを糖化させたのち、二四〜五度に冷却、酵母を加えて発酵させる。発酵液を蒸留してアルコール分約六〇%とする。これを精だるにつめて貯蔵する。期間は最低七年、良品では一二〜一五年ねかせると、この間にたる材から香味に關与する微量成分が抽出され、色調も無色から淡茶褐色に変わって行く。これがウイスキー原酒で、これをこのまま、あるいは土台にしてブレンドして製品とする。

【種類】(1)産地によつて、スコッチウイスキー・アイリッシュウイスキー・アメリカンウイスキー・カナディアンウイスキー、ジャパニーズウイスキーなどがある。スコッチウイスキーが最も有名で、四〇〇以上の銘柄が存在するが、五大商標といわれるホワイトホース・ジョニーウォーカー(赤と黒の二種類がある)・ホワイトラベル・ヘイグ・ブラックアンドホワイトなどが著名である。また蒸留所の所在地によつてハイランドモルトウイスキー・ローランドモルトウイスキー・アイレイモルトウイスキー・キャンベルタウンモルトウイスキーの四つに分類される。

アイリッシュウイスキーは、麦芽のほかにおもむきを原料とするいわゆるグレンウイスキーで、ポット STILL で蒸留し、ブレンドしないのが特徴である。アメリカ産は根本的にはスコットランドのグレンウイスキーと同じようにつくられる。穀類と麦芽の使用割合の違いによつて、ライ・バーボン(トウモロコシ・ホイト(コムギ)・モルト)・ライモルトウイスキーに分けられる。カナダのものは、トウモロコシ・コムギ・ライムギを麦芽で糖化してろみをつくるが、コムギの使用量の多いのが特徴である。日本のものは、スコッチウイスキーを教師として伸びてきたので、製造法も香味もスコッチによく似ている。

(2)原料によつて、モルトウイスキー(麦芽だけをほかに、泥炭を使って独特の薫香をつけること、ポット STILL で蒸留すること)と、グレンウイスキー(穀類を原料としてこれを麦芽で糖化させてつくる。またバテント STILL で蒸留すること)が含まれる。それゆゑモルトウイスキーのような薫香もなく、アルコール以外の揮発性成分もないので香味が軽い、ブレンデッドウイスキー(モルトウイスキーとグレンウイスキーを混和したもの)の三種に大別されるが、製品としてはこれら単品(ストレート)だけのものは少ない。種類の違うもの、同種でも年代の違うもの、製法の違うものなどを適当にブレンドして独特の一定の特徴をつくり出すことがついで、するといふと舌の芸術作品ともいえる。

(3)蒸留機によつて、ポット(スチル)ウイスキーと、バテント(スチル)ウイスキーに分けられる。特徴は前述のとおりである。(4)わが国の酒税法では、つぎの三つに区分されている。特級(①ウイスキー原酒だけのもの、②ウイスキー原酒混和率二七%以上のもの、③アルコール分四三%以上のもの)、一級(①原酒混和率一七%以上二七%未満、②アルコール分四〇%以上四三%未満、二級(特級および一級以外のもの)。

【飲み方】食前・食後いづれにも飲まれる。近年、アメリカで婦人や若い消費層をねらつて飲みやすいウイスキーをつくるようになり、日本でも、一九六四年(昭和三九)にサントリー・レッドがソフトウイスキーとして売り出された。そうしたソフト化の傾向も相まって、一〇年間に消費も三倍の増加を示している。

よいウイスキーは、ストレート(生のまま)で口にくみ、芳香や「こく」を楽しむのが最上といわれる。このためにはつめた水と交互に飲むのがよい。また、水でわつたり(水わり)、氷片の上に注いだオンザロックとしてもよい。バーなどでは「シンブル」とか「ダブル」とかいいた量は、ジガー(計量カップ)に一杯(三〇ミリットル)、二杯のことをいう。また、ふつうのコップ(タンブラー)に入れた場合、約一オンスが「シンブル」にあたる。

日本における酒類消費の推移 (単位 1000ℓ)

年 度	1965	1970	1975	1977
清酒	1 197	1 532	1 675	1 593
ビール	1 923	2 910	3 736	4 070
ウイスキー・ブランデー	65	132	238	298

注 「国税庁統計年報書」による

このような飲み方のほかに、カクテルのベースとしても愛用される。氷片を加えソーダ水でわつたハイボール、カクテルの女王といわれるマンハッタン(ウイスキーとベルモットを二対一の割合にまぜ、ビタース一滴、氷片をまぜ、チェリー一個をかざり、レモンピール(皮)を絞らけたもの)などが一般に親しまれている。

【福西英三著『ウイスキー百科』(二六六・柴田書店)】▽梅田晴夫著『ウイスキーのフォークロア』(二七五・柴田書店)

ウイスキー・サワー Whisky Sour レモン汁二〇ミリットル、ウイスキー五〇ミリットル、砂糖ティースプーン一杯以上、それに氷塊四、五個をシェーカーに入れ、よくシェイクする。サワーグラスに注ぎ、少量の炭酸水を足し、レモン輪切り一片と、マラスキノ・チェリー(カクテルなどに入れる紅色のサランボ)を一個入れる。サワーは、酸味の意味なので、砂糖を多くいれすぎないほうがよい。食事などに関係なく、清涼感と満腹をゆるめるための好適の飲物であるが、かなり強い飲物である。

【ウイスキー WISC アメリカの心理学者ウェックスラーの作成した児童用知能検査法で Wechsler Intelligence Scale for Children の略称である。】

この検査の特徴は、言語性検査と動作性検査に分けて別々に IQ (知能指数) が求められる。さらに全検査の IQ も算出することである。また両検査は六種類の F 位検査からなり、診断に役だつように考案されていることである。実施は個別のであり、適用範囲は五歳から一五歳までである。

【ウイスキー WISC アメリカの心理学者ウェックスラーの作成した児童用知能検査法で Wechsler Intelligence Scale for Children の略称である。】

なお、一六歳以上の成人用としてウイスキー (W A I S S) があり、ともに日本版が標準化

されており、公刊されている。【品川不二郎著『兄玉省品川不二郎著 WISC 知能診断検査法』(二五三・日本文化科学社)】

ウイスキー WISC Wisconsin アメリカ合衆国中北部の酪農州にミネソタ・アイオワ・イリノイ・ミシガン州に開ける。一六三四年以来、フランス人が探検・植民をしたが、一七六〇年にイギリス領、八三年に合衆国領となり、一八四八年に州となった。面積は一四万五四八平方キロ。人口は四四一・八万(一九七〇)。州都はマディソン。

西方をミネソタとアイオワとの州境をなすミシシッピ川が流れ、州の大部分をその流域とするウイスキーコンシン川がこれに注ぐ。州南部は氷河地形による小起伏が多いが、北部は一般に丘陵・山地が多く、森林が広がる。州の大半は洪積期の大陸河の影響で、大小八五〇以上の湖がある。気候は湿潤大陸性で、夏は比較の涼しく、冬は寒い。

ウイスキーコンシン州は「アメリカの酪農国」と呼ばれるほど酪農が盛んである。一九六六年一月一日現在、二二八・三万頭の乳牛が飼育され、全米第一位を誇る。農地の八〇%は酪農に利用される。干し草・牛乳・チーズの生産は全米第一位であるが、バターはミネソタ州に次ぎ第二位である。トウモロコシ・クランベリー(ツルコケモモ)・蜂蜜の生産も大。鉱物では、亜鉛・鉄・鉛・石材などが重要である。豊富な水力資源の利用により工業化も進み、工業総生産額は農業総生産額を上回り、機械類・食品加工・自動車などの生産が盛ん。最大の工業都市はミルウォーキーである。

ミシガン湖岸をはじめ、各地に避暑・休養地が散在し、夏は水泳・水上スキー・釣り・狩猟・キャンプが、冬はスケート・スキーがおこなわれる。住民にはスイス・スカンジナビア・ドイツ系統が多く、特色ある文化を保持しているところもある。ウイスキーコンシン大学をはじめ大学も多い。

スウェーデンが二五〇〇(二六)年、サウスウーイストが二五〇〇(二六)年、ペンベキエラ島は約九〇〇である。これら三島は橋で連絡しており、牧羊とニシン・海藻などをとる沿岸漁業がおこなわれる。

〔井内 昇〕

ウィースバーデン Wiesbaden 西ドイツ中部、ヘッセン州の州都。面積一六四平方キ、人口二四九四〇〇(二六)年。マインツの北方、フランクフルト・アム・マインの西約四〇キ、タウヌス山地の南麓にある温泉都市で、保養地として名高い。温泉は食塩泉で六八度の高温。リウマチ・痛風・座骨神経痛にきく。ライン川に沿う港、保養施設・国立劇場・城・高等裁判所・区裁判所・行政裁判所・職人組合・連邦統計局のほか、多くの出版社、映画撮影所、各種の工場、ぶどう酒取引所などがある。

温泉はローマ時代から知られ、一二四二年前にすでに都市であった。一八一五・一八六六年はナッソー公国の首都であり、第一次世界大戦後の一九一八・一九一九年には、ドイツ駐在のフランス・イギリス軍本部がおかれたところである。

〔佐々木博〕

ウィスラ(三) ヴィスラ(三)

ウィスリツェヌス Johannes Wislicenus

(一八三二—一九〇三) ドイツの有機化学者。立体化学の研究で有名である。クウェルフト近くの小村に牧師の子として生まれた。一八五三年ハレ大学の化学の助手となった矢先に、自由思想の持主で職を追われていた父の投獄が宣告されたため、一家はアメリカへ移住した。ハーバード大学の助手となり、五五年にはニューヨークで化学分析所を開いた。

ハレ大学にもどれたのは五七年であった。当時、有機化合物の分子の仕組みについては*ペルツェリウスや*コルベや*リービッヒらのさまざまな説があったが、どれも複雑な分子の解明にはあてはまらなくなっていた。彼は新しい考え、*ジェラルルのタイプ説を採用し、実験で証明しつつ、論争に参加した

(一八六九)。

家族のいるチューリヒに移り、六一年同地の工科大学教授となった。ここには生涯をかけた研究、乳酸の分子の仕組みの研究が待っていた。当時、乳酸には腐った牛乳からとれる

る発酵乳酸と肉汁からとれる肉乳酸とがあり、どちらも同じ分子式であったが、ほんのわずかに性質が違っていた。性質の違いがきわだつていけば、これは異性体であった。彼は六三・六九年、二つの乳酸にどんな原子グループが含まれているかを合成実験によって確かめ、いずれも $\text{CH}_3\text{CH}_2\text{CH}_2\text{COOH}$ の四つのグループからできていることをきつめた。しかし、それらのグループのどんな配置の違いも当時の異性体の考えでは説明できなかった。ところが六九年、彼は二つの乳酸が光学的な性質、すなわち*旋光性においていちじるしい違いがあることを発見し、画期的な考えを発表した。つまり、乳酸の分子の原子グループは平面的ではなく、立体幾何学的に配置されているというのである。そしてこういう異性体を「幾何異性体」とよんだ

(一八七四)。今日の立体化学の思想がはじめて述べられたのである。この着想にヒントを得たオランダの*ファン・ト・ホッフが立体化学の基礎となる有名な論文をだしたのは翌年であった。平面を立体にしたらど冷たであった化学界にあつて、ウィスリツェヌスは早くこの論文を支持した。

ウェルツブルク大学教授(一八七二)をへて八五年以降ライプツヒ大学に移り、立体化学の考えをさらに発展させた。彼はすぐれた教師であり、長いひげと知的な容貌と身のかしは学生の尊敬の的であった。彼の改訂した『ストレッカーの化学教科書』は広く読まれた。生涯、社会や政治の動きに関心をもち、ライプツヒの議員となり、熱烈なドイツ統一論者であった。化学の面でもつねに新しい理論の側に立ち、すぐれた実験家であった。ライプツヒで没したが、晩年はシュヴァインフルト近くの別荘で、狐をしながら研究の余暇を楽しんだという。

〔大沼正則〕

ウィーゼ Leopold von Wiese (一八六一—一九二六)

ドイツの社会学者。ベルリン大学講師などを経て、一九一九年以来ケルン大学教授。*ジンメル(一八六三—一九二〇)の形式社会論の概念があいまいであるところから、さらにそれを発展・体系化して、関係学 *Beziehungslehre* としての社会学を唱えた。ジンメルが社会の本質を心的相互作用とした

ものを社会の相互関係にとらえ直し、結合と分離という二つの大きな要素と、それに伴う社会過程・社会的距離・社会的空間・社会形象(群衆・集団・抽象的集合体)という四つの基礎範疇をたてて社会を説明した。社会学を個別科学として樹立した功績は大きい。主著『一般社会学体系』(一九二〇)。(武田良三) レーモン・アロン著 秋元・河原・芳仲訳 『現代ドイツ社会学』(一九二六、理想社) ウィーダ Ouida (一八八一—一九〇三) イギリスの女流小説家。本名マリー・ルイズ・デラ・ラメラ。フランス人の父とイギリス人の母の間に生まれた。一八七四年以後イタリアに住み、多くのメロドラマ風な小説で有名になったが、犬への深い愛情と、不正への抗議と芸術への情熱をこめた児童文学『フランダーズの犬』(一九〇三)が名高い。ほかに『ニュールンベルグのストロブ』(一九〇六)もよく読まれる。(神宮輝夫) 〔中尚志訳〕『フランダーズの犬』(一九〇七、岩波書店) ウィター・セクスアリス ヴィクター・セクスアリス



ウィター Georges Fernand Vidal (一八六三—一九二六) フランスの歴史学者。陸軍軍医の子としてアルジェリアのデリスに生まれる。パリ大学で医学を修めた。陽チフスの予防注射に関する研究を、学位をえた一八八九年ごろからはじめ、九六年に陽チフス患者者の血清中に陽チフス菌に対する凝集素を発見し、その特異な凝集反応(ウィター反応)によって本病の診断をすることを提唱した。同年、母校の教授資格者となり、一九一一年にその正教授となった。一九〇〇年に体液の細胞診に関する研究をおこない、〇六年には浮腫中の塩が演ずる役割についての実験を公表した。さらに〇七年、血友病患者の赤血球がし

だいにもろくなることを実験的に証明している。彼はまた臨床家としてもすぐれた手腕を発揮し、教師としても名講義をおこなったことで知られている。(大島蘭三郎) ウィチタ Wichita ウィチターともいう。アメリカ合衆国カンザス州の中心都市。人口は二七・七万であるが、衛星都市・郊外を合わせると三八・九万になり、州第一の人口をもつ。アーカンザス川沿いに位置し、標高は約四〇〇尺。一八六八年に市が建設され、七二年の鉄道建設以後、ウシの町として発展した。現在、州南部のコムギおよび石油の大集散地で、製粉・かん詰・石油精製をはじめ航空機・自動車の部品などの工業がおこなわれる。ウィチター ヴィチタ

割を果たした。シベリア鉄道の建設などでアジアへの経済的進出をはかったが、軍事的冒險政策には反対で一九〇三年辞職した。〇五年の日本の講和会議で活躍し、同年の革命の末期、ツァーリに立憲制の実施を決定させて革命を切り切り、また革命からの立ち直りのための外国からの借款にも成功したが、反動派の策動のため、立憲内閣の初代首相の地位をわずか数か月で去った。

〈島山成久〉

ウィッテンベルク Wittenberg 東ドイツハレ県の工業都市。人口三・三万（一九七〇）。かつてはプロイセンのザクセン領。エルベ川右岸にあり、ライプチヒ北東五五キロ、標高七二メートル。一五七一年に始まった宗教改革の発生地として有名であり、ルター・メランヒトン・ブーゲンハーゲンの家がある。ルターの墓や、彼が九五のテーゼを書きつけた「テーゼの扉」のある一五世紀建設の教会を含めて、宗教改革にちなんだ歴史の建造物が多い。ルターが説教し、クラナッハ祭壇と絵画のある都市教会、宗教改革歴史博物館である「ルター館」、ルターが住み、メランヒトンの家であった一六世紀のアウグスティン修道院の遺跡などがある。

鉄道の要衝に当たり、またエルベ川の港でもある。繊維・紙・アルコール・皮革・せっけん・陶器・電気器具・セメント工業が盛ん。一六〇〇年、ザクセン・ウィッテンベルクとなり、一八九三年都市として認められた。一五〇二年大学が設立され、ルターも教壇に立ったこともあったが、一八七一年ハレ大学に合併された。一八五一年プロイセン領となった。

〈佐々木博〉

ウィット Wit 機知・頓知・才知などの意であるが、ときには「ユーモア」や「しゃれ」などと混同して使われる。あるものを表現するのには、平凡でなく、新奇な、人の思いつかないような発想で、しかも的確に述べる、すばやい知的活動をいう。イギリスの詩人ドライデンは、「思いの鋭さ」と定義し、ポーは、「巧みに粉飾した自然らしさ」が真のウィットであるとしている。〈小林亨〉

ウィット Otto Nikolaus Witt (一九〇一—一九五五) ドイツの染料化学者。ペテルブルク(レニングラード)生まれ。一八七一年チューリッ

ヒ工科大学に入学、*コップ教授から当時の合成染料工業を学び、七五年にロンドン近くのプレントフォードの染料会社に入社。翌年オレンジ色の新染料クリソジンを発明し、さらに新染料トロペオリンも発明した。七六年に染料物質のどんな分子構造が発色に関係があるかに関する先駆的学説、すなわち発色団・助色団の説を提出した。七九年イギリスを去り、九一年ドイツのシャルロッテンブルク工科大学教授。化学の特許に関する著書ほかあり、科学啓蒙誌「プロメテウス」を発刊(一九二〇)。彼の文章は科学啓蒙の模範といわれる。ベルリンでドイツ化学会の講演を終えた夜、心臓発作のため没した。〈大沼正則〉

ウィット Gustav Witt (一九〇一—一九五五) ドイツの天文学者。ベルリンのウラニヤ天文台員。一八九八年写真観測によつて小惑星四三三番を発見し、エロスと命名した。当時エロスは一等として観測され、一日に約〇・五度角の割合で逆行中であることが確認された。この運動を追跡して軌道を計算した結果、エロスは火星の軌道の内側にはいるこむ特異小惑星であり、地球には約六分の一の天文単位まで接近することがわかった。この機会をとらえて地心視差を測定し、これにもとづいて天文単位距離の基準値を一九三三年に発表した。〈島村福太郎〉

ウィット ゲンシュタイン Ludwig Josef Johann Wittgenstein (一九〇一—一九五五) オーストリア生まれの哲学者。一九二〇年代には、オーストリアにいて、ウィーン学団のメンバーに強い影響を与えた。そのころの思想は、論理の原子論風のものであり、ラッセルとの相互影響のもとに形づくられた。その後、しだいに、人工言語による哲学的分析の方法に疑問を持つようになり、一九三九年、イギリスのケンブリッジ大学教授のころから、日常言語の分析のほうに哲学の意義を見いだすようになった。生存中に出版した著作は、一九二一年刊の『論理哲学論』一冊だけであるが、口頭の議論により、イギリスの分析哲学界に大きな感化を及ぼしたといわれる。近時『Philosophical Investigations (一九五三)』など多くの遺稿が出版されたといえる。〈吉田夏彦〉

ウィットフォーゲル Karl August Wittfogel (一九〇一—一九八〇) アメリカの社会経済史学者。ドイツに生まれ、ハイデルベルク大学でマックス・ウェーバーに師事した。アジアとくに中国社会についてマルクス主義の立場から研究し、旧中国の農村社会の特徴、工業発展の停滞性、官僚主義的封建国家の経済的基礎などを明らかにした。その説は、国家の治水灌漑事業を中国社会の基礎的要因と考えるものであり、「水の理論」とよばれる。学生時代から労働運動に参加し、のち共産党員となったが、一九三四年ナチス政権に追われてアメリカに亡命した。著書に『市民社会史』(一九四一)、解体過程にある支那の経済と社会(一九四二)、東洋の社会の理論(一九四三)、『東洋的専制主義』(一九四四)などがある。〈藤田勝次郎〉

ウィップ ステッチ whip stitch ウィップとは糸を巻くこと、布を軽く浅くかがり縫いに縫うこと。縁まつり縫い、浅くかがり縫いに同じ。〈田中千代〉

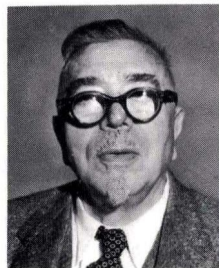
ワイデルマン Gustav Heinrich Wiedemann (一八二六—一九〇七) ドイツの物理学者で化学者。電気学の実験的研究で知られている。とりわけ、金属の熱伝導度と電気伝導度の比が、同一温度ではすべての金属について等しいという法則を実験的に見だし(一九二六)、これはワイデルマン・フランツの法則として著名。そこにあらわれる定数をワイデルマン・フランツ定数とよぶが、のちに金属電子論により理論的にあつづけられた。バーゼル・ライプチヒ大学ほかの教授を歴任。〈藤村淳〉

有為転変 ういてんぺん 人間社会・人間生活がたえず変化して定めないことから、人の世のはかなさを表わす。〈有為〉

ワイード Gustav Wied (一八八二—一九五五) デンマークの小説家・劇作家。レーラン島の富裕な農家に生まれ、母からおとぎ話を聞いて育って、生涯この牧歌的少年時代をなつかしんだ。苦悶のち作家生活にはいり、才筆をふるって縦横の活躍をし、デンマーク文壇のアンファン・テリアル(恐るべき子)と目された。一般には明るい機知と、ほろ苦い風刺の軽快な作家とみられたが、傷つきやすい鋭敏な感受性の持主で、第一次世界大戦の勃発後まもなく絶望のうちに自殺した。作品は多く、小説では陰影深い短編集『影絵』(一九二六)、退廃した貴族社会を描いた『父たちは葡萄を食う』(一九二七)など、劇では『貴族・僧侶・市民・百姓』四つの風刺劇(一九二七)、『踊る二十日鼠』(一九二八)が有名早く森岡外が短編『尼』、劇『ねんね籠』などを訳した。〈山室静〉

ワイトワールスラント Witwatersrand 南アフリカ共和国トランスバール州南端部の鉱工業地帯。地名(オランダ語)の意味は、「白い水の分水嶺」で、北に流れるクロコディアール・リンボボ両川と、南に流れるバル・オレンジ両川の水源地帯であり、分水嶺をなす標高平均約一八〇〇メートルの高原地帯をさす。ヨハネスバーク市を中心に、この地名の生まれた一九世紀末には、東はスプリングズ市 Springs から、西はラントフォーン市 Randfontein まで、東西に約九六キロ、南北は約三三キロの金鉱山地帯(面積約三三〇〇平方キロ)をさした。その後、南西方に新金鉱が発見されたので、ポツェフストローム市 Potchefstroom からクレルクスドルフ市 Klerksdorp 付近までを、ワイトワールスラントに含める場合もある。これらの新地域を除いて、一九六〇年の総人口三〇〇万以上(白人約八〇万)、ヨハネスバーク市(約一一万)のほか、ジャミーストン Germiston (約二二万)を先頭に、きわめて多くの鉱工業都市が集中して、世界最大の金鉱地帯であるほか、この国の工業総生産の四〇％以上、とくに金属工業や機械工業の五〇％以上を独占している。ワイトワールスラント大学はヨハネスバーク市にある。なおワイトワールスラントはたんに「ラント」Rand と略称されることもある。〈西野照太郎〉

ワイナー Norbert Wiener (一九一八—一九九八) アメリカの数学者でサイバネティクスの創始者。ミズーリ州のコロンビア市でユダヤ人の長男として生まれた。一九〇九年タフツ大学を卒業後、ハーバード・コネル・ケ



ワイナー Norbert Wiener (一九一八—一九九八) アメリカの数学者でサイバネティクスの創始者。ミズーリ州のコロンビア市でユダヤ人の長男として生まれた。一九〇九年タフツ大学を卒業後、ハーバード・コネル・ケ

ンブリッジ・ゲッチンゲンの各大学で動物学や数理解・数学などを研究した。職歴もさまざまで、ハーバード大学の哲学講師、数学教師、GEの見習工、百科全書編集員、新聞記者などをへて一九二四年、マサチューセッツ工科大学にはいり、三二年教授となった。数学では実関数論・調和解析・級数論・確率論の研究などがあるが、そのほか物理学・電気通信工学・神経生理学・精神病理学など広い分野で重要な貢献をしている。とりわけ「ウィナー測度」を基礎とするブラウン運動の理論や、のちにフィンマン R. F. Feynman によって拡張され、物理学に広く持ちこまれたウィナー積分論、通信と制御工学の分野に統一をもたらした時系列の平滑と予測の理論、ろ波 (フィルタ) の理論などは画期的な業績である。さらに第二次世界大戦中、電気回路を通じて自動調節する自動照準の研究にたずさわったことから、一九四八年に新しい学問としてサイバネティクスを提唱、動物と機械における制御と通信を統一に取り扱う試みを開始し、人間の精神活動から社会機構にまでおよぶ統一科学の建設を意図した。

〔藤村 淳〕

〔N〕ウィナー著・池原止戈夫訳『ノバート・ウィナー自伝』(二六六・錦書房)▽同著・鎮目恭夫訳『サイバネティクスはいかにして生まれたか』(二六六・みすず書房)ウィナー Alexander Solomon Wiener (一九一七) アメリカの血液学者。ニューヨークに生まれ、コネル大学(一九三六)・ニューヨーク大学(一九三六)を卒業した。血液学・血清学を専攻し、一九三三～三五年アルブクリンのユダヤ病院の遺伝学と寿命測定部長をつとめた。ウィナー研究所(一九三五)・ウィナー血清研究所(一九四五)を設立し、それぞれの所長となる。Kell氏式血液型の発見をはじめ、血液型の遺伝、輸血、アレルギー性疾患の遺伝や免疫化学などの研究をおこなっている。数多くの賞を受けている。

〔大島蘭三郎〕

ウィナーノイシュタット Wiener Neustadt オーストリア東部、ウィーン南方約五〇*にある工業都市。人口三・五万。鉄道が集中しており、ウィーンへの運河も通じている交通上の要地。車両・船舶などの輸送

機械をはじめ、鋳物・繊維・製紙・セメント・製靴など、各種の工業がさかんである。一一九四年に町の基礎が建設され、一三八〇年には市としての権利を得ている。〔江波戸 昭〕

ウィニペグ Winnipeg カナダ、マニトバ州の中心都市。州南東部、ウィニペグ湖南端近くに位置する。人口は一九六一年の調査によると二六・五万であったが、一九七六年の調査では五六・一万と急激な増加をみせ、カナダ第三の大都市となっている。一七三八年に最初の集落がフランス人によってつくられ、当時はフォートルージュと呼ばれた。一八七三年ウィニペグ市となる。八五年のカナダ太平洋鉄道の完成により、プレーリーの中心都市となる基礎ができた。現在、世界有数の巨大な小麦市場があり、小麦貯蔵庫・製粉工場・屠殺場・肉かん詰工場など、農畜産品に關係した施設が多い。自動車・農業機械・衣料品・紙製品などの製造もおこなわれる。

マニトバ大学・マニトバ農科大学などの高等教育機関もある。鉄道・ハイウェイ・航空路の重要な中心でもある。

〔正井泰夫〕

ウィニペグ(川) Winnipeg カナダ南部の川。オンタリオ州のウニペグ湖に発し、北西流してマニトバ州のウニペグ湖に注ぐ。ネルソン川水系の一部をなす川で、長さは約三二〇*。下流部には急流と滝が多く、ボウンス・タズ・フォールズ・マッカーサー・フォールズ・グレート・フォールズ・バイン・フォールズなどの水力発電所がある。主要な支流はイングリッシュ川。

〔正井泰夫〕

ウィニペグ(湖) Winnipeg カナダ南部マニトバ州の湖。洪積期に存在した巨大なアガシス湖のなごりの湖沼群のうちでもっとも大きい湖で、長さ三八〇*、幅九〇*、面積は二万四四九平方*。湖面標高二一七*。最大深度一九*。レッド・ウィニペグ・ベレイズ・ドーフィン・サスカチュワンなどの諸河川が流入し、ネルソン川によって排水される。漁業もおこなわれ、とくにホワイトフィッシュがとれる。南岸に保養地が発達している。

〔正井泰夫〕

ウィニペグ(湖) Winnipegosis カナダ南部マニトバ州の湖。ウィニペグ湖の西に

あり、同じく旧アガシス湖の名残りの一つ。長さ二〇〇*、幅四〇*で、面積は五三四〇平方*。標高は二五二*。湖水はマニトバ湖をへてウィニペグ湖へ排水される。カマスの水産が大である。

〔正井泰夫〕

ウィネバ Winneba 西アフリカ、ガーナ共和国、首都アクラから海岸に沿って南西方に約五〇*の距離にある保養地。エンクルマ元大統領時代に「クワメ・メンクム・マリイデオロギ研究所」が開設され、革命闘士の研修訓練をおこなった。また、アジア・アフリカ人民連帯会議その他、国際会議の開催地として知られる。経済的にはなんの特色もない村落にすぎない。

〔西野照太郎〕

ウィネバ(湖) Winnebago アメリカ合衆国ウィスコンシン州最大の湖。長さ約四五*で、最大幅は約一五*。面積は五五〇平方*。湖岸にオシロコシ Oshkosh・フォン・デラック Fond du Lac などの都市がある。氷河湖で景色がよく、水上スポーツも盛んである。

〔正井泰夫〕

宇井伯寿 ういはくじゅ (一八三二～一八八三) インド哲学者・仏教学者。幼名は茂七。愛知県生まれ。二歳で曹洞宗に入門し、伯寿と改名した。東京帝国大学でインド哲学を学び、ヨーロッパに留学、のち駒沢大学・東北帝国大学・東京帝国大学の教授を歴任。諸外国語はもとより、サンスクリット・パーリ語・漢文・チベット語に通曉し、きわめて厳密・正確な学風で知られる。とくに『印度哲学研究』六卷(一九四三)は堅実・周到、しかも大胆な諸研究の論文集で、学士院賞を受けた。それに続いて日本ではじめての大部の『印度哲学史』を刊行、以後この研究論文集は計一二巻に及んだ。著書はひじょうに多く、とくに『仏教汎論』は仏教の全体を詳説した名著であり、また大乗仏教の唯識学について、原典・漢訳、それらの和訳を並べて比較対照した諸書があり、現在のインド哲学・仏教学を学ぶもので、その恩恵をこうむらないものはない。一九五三年(昭和二八)文化勲章を受章。(三枝充恵)

ウィーヘルト Weierstrass ヴィーヘルト Weierstrass メキシコなど南アメリカ諸国の男女の着ている上衣。二枚の布を二つ折りにして前後の中央、両わきで袖口

あきを残して縫い合わせる。なかには首を通す穴だけあけてあるボンチヨ型のものなどがある。一七世紀のミステク族の女が裸体の上に正方形の布に穴をあけて着たケスケミットル quesquemitl がスペイン来征のころには腰まで伸びて現代のウィーヘルトになったという。

ウィービンググラス weeping love-grass/ Eragrostis curvula Nees. イネ科の多年生植物。シナダレカゼクサともいう。南アフリカ原産。茎は密生して茂り、葉は細く長く伸び、真夏には一メートル以上もなつてしなだれる。ふつうは春から種子をまく。生長は早く、強く根を張って暑さや日照り・乾燥に強く、やせ地にもよく育つ。関東から南では冬には葉の部分が枯れるが、根もとは緑で残り、春早くから生育を始める。穂は二

○(三)ちで、小さい種子を多くつけ自然に繁殖する。葉は家畜の飼料とされるが、土手など急傾斜地によく根を張って土がくずれのを防ぐ力が強いのを利用して、最近ではむしろ造成地や、新設道路のへりなど土留め用に多く用いる。

〔星川清親〕

ウィーバーホルン Weibrahorn (一六二一) ドイツの地球物理学学者。初期は弾性余効の現象や電磁気学を研究した。ケーニヒスベルクからゲッチンゲン大学に転じてからは、地球物理学研究所を設置し、地球物理学・地震学を研究した。地震学に物理学的方法を導入し、地震計の数学的理論を進展させ、ウィーヘルト地震計を製作するなど、近代地震学の開拓者として知られる。地震および地球の内部構造に関して業績をあげ、人工地震・地震探鉱など、今日も彼の研究に負うこと



ろが多い。

たせるようになっていく。

正しい位置

ウィー（ト Ernst Weichert (一八八一

図はその起電の仕組みを示したものの（た

を与えるな

二五〇）ドイツの作家。東プロイセンの林務官

し、説明の便宜上二枚の平行円板を二つの同

ど、ドイツ

の子として生まれ、はじめは教職につき、そ

心円で示している。まず金属片Pに摩擦電

文学に多く

の間第一次世界大戦に従軍して負傷。一九三

気を近づけて正電荷をあたえたとすると、静

の功績を残

三年以降文筆活動をはじめ、しだいにナチ

電誘導によって、それに向き合うb₁には負、

している。

の行き方に批判的になり、講演や回覧文書

b₂には正の電荷が誘起される。そして円板が

また、ユー

でナチを非難したため、三八年に二か月間強

矢印の向きに回ると、b₁にふれた金属片は負

モアや機知

制収容所に送られ、出所後も国家秘密警察の

電荷を受けて、これをc₂に運びこみ、b₂にふ

や歴史小説の開拓によって後のロマン派への

監視下にあった。『死者の森』（一九四五）は、こ

れた金属片は正電荷をc₁に運ぶ。一方、b₁に

道を開いた。彼のもっともよく知られている

の収容所での体験を記したものである。四

ふれて負電荷をもった金属片がb₂に向き合う

小説は『アーガトン』（一七六六）である。

八年スイスに移り、チューリッヒ湖畔の寓居で

位置までくると、これも静電誘導によってb₃

ここでは、プラトンの理想主義に心酔する主

没した。郷土東プロイセン辺境の森林を支配

には正、b₄には負の電荷が誘発されるので、

人公が、さまざまな体験の末、結局、理想と

する自然の、単純で偉大な秩序への熱狂的思

円板の回転によってb₃にふれた金属片は正電

現実との妥協である一種の諦念に達する姿が

慕が彼の生活と文学の基調となっており、全

荷をc₁に、b₄にふれた金属片は負電荷をc₂に

描かれている。ほかに、『ドン・キホーテ』

作品に沈うつで瞑想的なふんい気が漂ってい

運んでいく。つまり、二つの円板はどちらも

を模倣した『ロザルバのドン・シルビオ』

る。代表的な小説として『単純な生活』（一

半回転ごとに交互に異符号の電荷をc₁・c₂に

（一七六六）、禁欲主義が女性の美に屈する韻文物

元）があげられる。晩年の大作『イエローミ

運び入れ、その結果両電極の電位差はしだい

語『ムザリオン』（一七六六）、機知に満ちた小説

ンの子ら（一九四四）のほか多くの作品がある

に高まっていくことになる。『服部学順』

『アデラの人々』（一七六六）がある。『鈴木邦武』

が、美しい童話も残している。『鈴木邦武』

初山踏（うやまふみ）本居宣長の国学書。一

『登張正実著』ドイツ教養小説の成立』（一六

ウィムズハーストの起電機

巻、宣長が『古事記伝』を完成した一七九八

『弘文堂』

静電誘導を応用して高電圧を発生させる機

年（寛政一〇）成稿、翌年刊行。初学者向き

ウィーラント Heinrich Otto Wieland

械。一八八三年イギリスの工学者ウィムズハ

の簡略な入門書であるが、近世国学の方法論

（一八七二—一八七五）ドイツの化学者。南ドイツの

ースト James Winchurst が考案したもの。

を実践的に述べたものともすぐれたもの。国

フオルツハイムに生まれ、ミュンヘン・ベ

その主要部は薄い金属片を等間隔にはりつけ

学の本質を『道の学問』とし、読むべき『古

ルリン・シュトゥットガルトの各大学に学ん

て互いに逆向きに回るように組まれた二枚

事記』『日本書紀』以下の古典をあげ、基礎

だ。一九一五年にミュンヘン工科大学教授と

の平行回転板と、二対の金属ブラシおよび櫛

となる解釈の方法を具体的に説く。また古語

なり、その後フライブルク大学教授をへてミ

状の集電極からできていて、円板の回転につ

や「みやびの心」を知ることが、古道理解に

ンヘン大学教授となった。二七年に胆汁酸

れて異符号の電荷が二つの集電極をへて別々

欠かせぬとし、『万葉集』『源氏物語』を尊

および有機窒素化合物などに関する研究によ

ライデン瓶蓄電器（L）にたくわえられ、空

重、和歌の実作もすすめている。『杉本つとむ』

てノーベル化学賞を受賞したほか、モルフ

気の絶縁性が破れて電極aに火花放電がおこ

ウィーラント Adrian Willaert (一五〇一

インおよびストリキニン系のアルカロイドに

るようになるまで電極間に大きな電位差をも

ろ（一五六一）一六世紀前半に活躍したフラン

ウィーラント（一世）William I (一〇七九—一

くからイタリアに出、一五二七年にはベネチ

アの聖マルコ大聖堂楽長。*モテト・*マドリ

ウィーラント（三世）William III (一六〇一

ガなどの作品がある。二重合唱様式を開拓

し、また門下生としてチブリアーノ・ディ・ロ

ウィーラント（四世）William IV (一六〇一—

レー・アンドレア・ガブリエリらを育成、ベ

ネチア楽派の基礎を定めた。『菅川達夫』

ウィーラント（五世）William V (一六〇一—

ウィーラント Christopher Martin Wie-

land (一八三一—一八八三) ドイツの小説家・詩人

ウィーラント（六世）William VI (一六〇一—

啓蒙主義時代に活躍し、ドイツ語の文体に平

易で優美な調子を導入したり、*クロップシ

ウィーラント（七世）William VII (一六〇一—

ュトックによって軽視された韻律にふたたび

ウィーラント（八世）William VIII (一六〇一—

ウィーラント（九世）William IX (一六〇一—

ウィーラント（十世）William X (一六〇一—

ウィーラント（十一世）William XI (一六〇一—

ウィーラント（十二世）William XII (一六〇一—

ウィーラント（十三世）William XIII (一六〇一—

ウィーラント（十四世）William XIV (一六〇一—

ウィーラント（十五世）William XV (一六〇一—

ウィーラント（十六世）William XVI (一六〇一—

ウィーラント（十七世）William XVII (一六〇一—

ウィーラント（十八世）William XVIII (一六〇一—

ウィーラント（十九世）William XIX (一六〇一—

ウィーラント（二十世）William XX (一六〇一—

ウィーラント（二十一世）William XXI (一六〇一—

ウィーラント（二十二世）William XXII (一六〇一—

ウィーラント（二十三世）William XXIII (一六〇一—

ウィーラント（二十四世）William XXIV (一六〇一—

ウィーラント（二十五世）William XXV (一六〇一—

ウィーラント（二十六世）William XXVI (一六〇一—

ウィーラント（二十七世）William XXVII (一六〇一—

ウィーラント（二十八世）William XXVIII (一六〇一—

ウィーラント（二十九世）William XXIX (一六〇一—

ウィーラント（三十世）William XXX (一六〇一—

ウィーラント（三十一世）William XXXI (一六〇一—

ウィーラント（三十二世）William XXXII (一六〇一—

ウィーラント（三十三世）William XXXIII (一六〇一—

ウィーラント（三十四世）William XXXIV (一六〇一—

ウィーラント（三十五世）William XXXV (一六〇一—

ウィーラント（三十六世）William XXXVI (一六〇一—

ウィーラント（三十七世）William XXXVII (一六〇一—

ウィーラント（三十八世）William XXXVIII (一六〇一—

ウィーラント（三十九世）William XXXIX (一六〇一—

ウィーラント（四十世）William XL (一六〇一—

ウィーラント（四十一世）William XLI (一六〇一—

ウィーラント（四十二世）William XLII (一六〇一—

ウィーラント（四十三世）William XLIII (一六〇一—

ウィーラント（四十四世）William XLIV (一六〇一—

ウィーラント（四十五世）William XLV (一六〇一—

ウィーラント（四十六世）William XLVI (一六〇一—

ウィーラント（四十七世）William XLVII (一六〇一—

ウィーラント（四十八世）William XLVIII (一六〇一—

ウィーラント（四十九世）William XLIX (一六〇一—

ウィーラント（五十世）William L (一六〇一—

ウィーラント（五十一世）William LI (一六〇一—

ウィーラント（五十二世）William LII (一六〇一—

ウィーラント（五十三世）William LIII (一六〇一—

ウィーラント（五十四世）William LIV (一六〇一—

ウィーラント（五十五世）William LV (一六〇一—

ウィーラント（五十六世）William LVI (一六〇一—

ウィーラント（五十七世）William LVII (一六〇一—

ウィーラント（五十八世）William LVIII (一六〇一—

ウィーラント（五十九世）William LVIX (一六〇一—

ウィーラント（六十世）William LX (一六〇一—

ウィーラント（六十一世）William LXI (一六〇一—

ウィーラント（六十二世）William LXII (一六〇一—

ウィーラント（六十三世）William LXIII (一六〇一—

ウィーラント（六十四世）William LXIV (一六〇一—

ウィーラント（六十五世）William LXV (一六〇一—

ウィーラント（六十六世）William LXVI (一六〇一—

ウィーラント（六十七世）William LXVII (一六〇一—

ウィーラント（六十八世）William LXVIII (一六〇一—

ウィーラント（六十九世）William LXIX (一六〇一—

ウィーラント（七十世）William LXX (一六〇一—

ウィーラント（七十一世）William LXXI (一六〇一—

ウィーラント（七十二世）William LXXII (一六〇一—

ウィーラント（七十三世）William LXXIII (一六〇一—

ウィーラント（七十四世）William LXXIV (一六〇一—

ウィーラント（七十五世）William LXXV (一六〇一—

ウィーラント（七十六世）William LXXVI (一六〇一—

ウィーラント（七十七世）William LXXVII (一六〇一—

ウィーラント（七十八世）William LXXVIII (一六〇一—

ウィーラント（七十九世）William LXXIX (一六〇一—

ウィーラント（八十世）William LXXX (一六〇一—

ウィーラント（八十一世）William LXXXI (一六〇一—

ウィーラント（八十二世）William LXXXII (一六〇一—

ウィーラント（八十三世）William LXXXIII (一六〇一—

ウィーラント（八十四世）William LXXXIV (一六〇一—

ウィーラント（八十五世）William LXXXV (一六〇一—

ウィーラント（八十六世）William LXXXVI (一六〇一—

ウィーラント（八十七世）William LXXXVII (一六〇一—

ウィーラント（八十八世）William LXXXVIII (一六〇一—

ウィーラント（八十九世）William LXXXIX (一六〇一—

ウィーラント（九十世）William LXXX (一六〇一—

ウィーラント（九十一世）William LXXXI (一六〇一—

ウィーラント（九十二世）William LXXXII (一六〇一—

ウィーラント（九十三世）William LXXXIII (一六〇一—

ウィーラント（九十四世）William LXXXIV (一六〇一—

ウィーラント（九十五世）William LXXXV (一六〇一—

ウィーラント（九十六世）William LXXXVI (一六〇一—

ウィーラント（九十七世）William LXXXVII (一六〇一—

ウィーラント（九十八世）William LXXXVIII (一六〇一—

ウィーラント（九十九世）William LXXXIX (一六〇一—

ウィーラント（百世）William LXXX (一六〇一—

ウィーラント（百一世）William LXXXI (一六〇一—

ウィーラント（百二世）William LXXXII (一六〇一—

ウィーラント（百三世）William LXXXIII (一六〇一—

ウィーラント（百四世）William LXXXIV (一六〇一—

ウィーラント（百五世）William LXXXV (一六〇一—

ウィーラント（百六世）William LXXXVI (一六〇一—

ウィーラント（百七世）William LXXXVII (一六〇一—

ウィーラント（百八世）William LXXXVIII (一六〇一—

ウィーラント（百九世）William LXXXIX (一六〇一—

ウィーラント（百十世）William LXXX (一六〇一—

ウィーラント（百十一世）William LXXXI (一六〇一—

ウィーラント（百十二世）William LXXXII (一六〇一—

ウィーラント（百十三世）William LXXXIII (一六〇一—

ウィーラント（百十四世）William LXXXIV (一六〇一—

ウィーラント（百十五世）William LXXXV (一六〇一—

ウィーラント（百十六世）William LXXXVI (一六〇一—

ウィーラント（百十七世）William LXXXVII (一六〇一—

ウィーラント（百十八世）William LXXXVIII (一六〇一—

ウィーラント（百十九世）William LXXXIX (一六〇一—

ウィーラント（百二十世）William LXXX (一六〇一—

ウィーラント（百二十一世）William LXXXI (一六〇一—

ウィーラント（百二十二世）William LXXXII (一六〇一—

ウィーラント（百二十三世）William LXXXIII (一六〇一—

ウィーラント（百二十四世）William LXXXIV (一六〇一—

ウィーラント（百二十五世）William LXXXV (一六〇一—

ウィーラント（百二十六世）William LXXXVI (一六〇一—

ウィーラント（百二十七世）William LXXXVII (一六〇一—

ウィーラント（百二十八世）William LXXXVIII (一六〇一—

ウィーラント（百二十九世）William LXXXIX (一六〇一—

ウィーラント（百三十世）William LXXX (一六〇一—

ウィーラント（百三十一世）William LXXXI (一六〇一—



イリアムとして知られている。イギリス王チャールズ一世の長女メアリの子、ジェームズ

二世の長女メアリの夫。一六七二年オランダ総督、フランスのルイ十四世のオランダ侵略に抵抗、その野心をくじいた。名誉革命に際し、議会の招請に応じて約一万数千の兵を率いて上陸、ジェームズ二世をフランスに逃亡させ、議会の提出した「権利宣言」を承認してメアリと共同戴冠した。ファルツ継承戦争中の九二年にフランス艦隊を撃破、スペイン継承戦争でもルイ十四世に對抗し、ウィリアム王戦争でフランスと戦うなど世中つねに反仏同盟軍の中心として活動した。内政面では軍制令・宗教寛容法を發布、一七〇一年には王位継承法によって、王位をスチュアート系の新教徒に限ることを規定した。また「君臨すれども統治せず」という王制を方向づけ、政党による責任内閣制の基を開き、立憲君主制の基礎を築いた。なおその治世中にインランド銀行(一六八四)・ロンドン株式取引所(一六八六)が創設された。
 ウィリアム(四世) William IV (一七五〇—一八三七) イギリス王(在位一八三〇—一八三七)。ジョージ三世の第三王子としてロンドンに生まれた。一七七九年以来海軍に勤務して多くの業績を残した。兄ジョージ四世の死により即位したが、すでに老齢であったので、その政治も優柔不断のそしりをうけ、選挙法改正の問題にもたえず動揺をくり返した。しかし世論の動きに驚き、新貴族の叙任に同意して上院に圧力を加え、改正案の上院通過を可能にした(一八三二)。彼はその後もしばしばホイッグ党との間に摩擦をおこしたが、後退を余儀なくされ、一八三七年没した。彼の子は一八二〇年夭折したので、姪のビクトリアが王位を継いだ。
 ウィリアム・アダムズ William Adams (一六〇〇—一六六〇年(慶長五) 来日したイギリス人。徳川家康の外交顧問。日本人

を三浦按針という。三浦按針

ウィリアム王戦争 — おうせんそう ウィリアム三世の治世中、北アメリカ植民地で戦われたイギリス・フランス両国間の戦争(一六八八—一七六三)。ファルツ継承戦争に呼応して起り、第二次百年戦争の発端をなした。隣接する両国の植民地間には以前から緊張があったが、新教徒であるウィリアム三世の即位は、ジェームズ二世を支持する旧教徒のフランス人との間の対立を深め、戦争となった。フランスはカナダ総督フロントナクの指揮下にケベックの守りを固めるとともに、インディアンの支援を得てイギリス植民地の辺境を攻め、イギリスはインディアンの一部族イロコイ族を味方にアカディアを抜き、ケベックに迫ったが失敗し、双方ともに決定的勝利を得ないまま、ライスウィック条約で終結を見た。↓ファルツ継承戦争

ウィリアムズ Samuel Wells Williams (一八二八—一八九四) アメリカの宣教師。シナ学者。米国外伝局員として一八三三年広東に行き、印刷出版事業を監督し、中国語・日本語を学び七三年(天保八)モリソン号で来日、また五三年(嘉永六)にはペリー艦隊の通訳官としてふたび来日した。広東では月刊『中国叢報』を編集、のち北京の米国公使館付書記官・代理公使・エール大学教授を歴任した。なお、七六年(明治九)マカオにあったころ、『聖書』の「創世紀」と「マタイ伝」を日本語に訳し、その原稿を日本にいたS・R・ブラウンに送付したが、これはのち火災で焼失した。

ウィリアムズ William Carlos Williams (一八九一—一九六三) アメリカの詩人。ニュージャージー州ラザフォードで開業医をしながら、生涯詩作に没頭した。パウンドとの交遊からイマジズムの影響を受け、初期の詩集『春とすべて』(一九二五)で新鮮な即物的詩風を確立した。誇張された象徴主義を排し、平明な観察をもとにした「客観主義」の詩を標榜。詩集『プリュゲルの絵その他』(一九二六)で一九六三年ピューリッツァー賞を受け、また五部作『パタンソン』(一九四六)では卑近な題材で日常の言葉を駆使して壮大な叙事詩を書き上げた。アメリカ詩壇の長老の一人。ほかに『自

伝』(一九五二)や小説・評論もある。〈新倉俊一〉
 片桐ユズル・中山谷共訳『ウィリアムズ詩集』(一九六五・国文社)

ウィリアムズ Tennessee Williams (一九一〇—一九八三) アーサーミラーと並ぶ現代アメリカの代表的劇作家。南部に生まれ、不況時代のセントルイスで不安定な青春時代を送り、アイオワ州立大学で劇作を専攻、卒業後は雑多な職業を転々としながら各地を放浪して戯曲・詩・短編小説を書いた。作品の多くは南部のよどんだ風土を背景に、人間の赤裸々な闘争の様相を甘美な詩情で包み、独特の美的世界をつくりあげている。出世作『ガラスの動物園』(一九四五初演)は自伝的要素の濃い詩情豊かな戯曲で、一家崩壊の過程を追憶というペールを通して描いたもの。次作『欲望という名の電車』(一九五七)では、滅びゆく南部の文化的伝統を固守して孤立し、みずから欲情のために敗退する特異な女性像を創造して成功した。『夏と煙』(一九五八)『ばらのいれずみ』(一九五九)などを経て、次の成功作『やけたトタン屋根の猫』(一九五五)は遺産相続をめぐる家族間の醜いかけひきをして、虚偽をかためた人間の外衣をはぎとり、執念と執念のぶつかりあう強烈な争闘を描く。以後、世俗的暴力と妥協せず孤独のうちに閉じこもる芸術家たぎの人物の敗北の物語に終始し、『地獄のオルフェウス』(一九五八)『この夏突然に』(一九五九)などでは、愛の価値の否定、弱肉強食の社会構造などを通じて人生に疑問を投げかける暗い思想を展開させたが、『イグアナの夜』(一九六六)からあとは、寛容と忍従の精神を訴えている。作品の多くは映画化され、主要な戯曲は日本でも翻訳上演された。一九五九年(昭和三四)来日した。



上)の猫』(一九五五)では

鳴海四郎他訳『テネシー・ウィリアムズ一幕劇集』(一九六六・早川書房)▽田島博訳『ガラスの動物園』▽『欲望という名の電車』

▽『やけたトタン屋根の上の猫』(ともに新潮文庫)

ウィリアムズ Theodore Samuel Williams (一九一〇—一九九〇) アメリカのプロ野球選手。カリフォルニア州サンディエゴ市出身。一九三九年から六〇年まで一貫してボストンレッドソックスの外野手をつとめ、アメリカカンファレンスの左の強打者として活躍した。最高殊勲選手に二度、三冠王にも二度なっており、首位打者六度、本塁打を五二一本打っている。六六年に野球殿堂入りした。

ウィリアムズ Hank Williams (一九二二—一九五三) アメリカのカントリー・アンド・ウェスタン歌手、作詞・作曲家。アラバマ州生まれ。一三歳で自分の楽団を結成、一九四七年にレコードでデビュー。四九年ランドオール・オーブリーに出演して人気スターとなった。黒人のブルースを好み、その影響を受けた人で、演唱と作詞作曲を通じてウェスタンを幅広く一般に近づけた功労者。代表作には『ジャンバラヤ』『冷たい冷たい心』などがある。

ウィリアムズ Roger Williams (一九二一—一九九〇) アメリカのボビュラー・コンサート・ピアノ奏者。ネブラスカ州生まれ。三歳からピアノを学び、ジュリアード音楽院ではジャズも学んだ。一九五五年に『枯葉』のミリオンヒットで確固たる地歩を築いた。ソフトなタッチの気品ある演奏を聞かせる。『青木 啓』

ウィリアムズ Andy Williams (一九二七—一九九〇) アメリカのボビュラー歌手。アイオワ州生まれ。少年時代から三人の兄とウィリアムズ・ブラザースを組んで歌った。一九五三年に独立、『パタフライ』(一九五七)をはじめ数多くのヒット・レコードを生み、六一年からNBCテレビで自身の主演番組『アンディ・ウィリアムズ・ショー』を開始、人気を博した。テーマソングは『ムーン・リバー』。美しい歌心と誠実な人柄がよく出た演唱は広く愛されている。七〇年来日。
 ウィリアムズ Burgess Williamsburg アメリカ合衆国バージニア州の古い都市。人口は九〇六九二七〇。一六三二年に建設され、一七二二年にはバージニア州最初の市となった。一六九九年から一七七九年まで州都。植

を使つて分離精製し、酵素は担体と活性基からなるという説を唱えた。

〔道家達将〕

ウイルスは、細菌よりも小さく電子顕微鏡でないと見られない粒子で、適当な生きた細胞を選択して寄生・増殖するが、人工的な細胞では培養できない。病原微生物の一種とされるが、生物とも無生物ともいえない面もある。

【発見・研究の歴史】ロシアのイワノフスキー（Ivanovskii）はタバコモザイク病にかかったタバコの葉の搾液を陶土製のシャンペラン型細菌濾過器にかけて病原体を分離しようとしたところ、その濾液に病原性が残っていることを発見し、一八九二年に発表した。これとはまったく独立に一八九八～九九年、ドイツの「フレドリック・ロッシュ」P. Frosch は、ウシの口蹄疫の病原体がやはり細菌濾過器を通過することを発見した。その後、黄熱・狂犬病・牛痘など人畜の伝染病や、タバコモザイク病のような植物の伝染病のウイルスが多数発見され、いずれも同じ性質をもつことがわかった。一方、一九一七年にフランスのデレル（F. d'Hérelle）は、赤痢患者の腸内容を細菌濾過器で濾した濾液が赤痢菌を溶かし、その溶菌液はまた菌を溶かす働きがあるという現象を発見し、細菌を食う生物という意味でバクテリオファージと命名したが、のちにこれは細菌に感染するウイルス（細菌ウイルス）であることが明らかになった。さらに、三五年アメリカの「スタンリー」がタバコモザイク病のウイルスを核たんぱく質の結晶として精製することに成功し、ウイルスを微生物の一種と考えていた多くの人たちに大きな衝

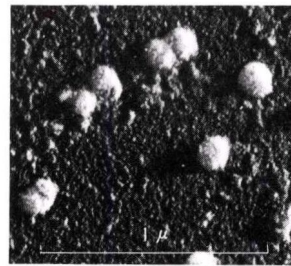
撃をあたえた。また、四〇年代からアメリカでファージに関する研究が集中的に開始されてきた。この研究は「分子生物学の勃興」ともに、生物現象の解明に有力な材料を提供した。五〇年代にはいよいよ、生体をそのまま使わなければ増殖できなかった動物ウイルスも、組織培養法によって生体外でも取り扱えるようになり、急速に研究が進んだ。

【性質】大きさは大部分が一〇ミクロンから四〇ミクロンの範囲にある。たとえば大形のオウム病ウイルスで約四〇〇、中形のアデノウイルスで約七〇、小形の口蹄疫ウイルスで約一〇ミクロンである。また形態は球形が多いが、痘瘡ウイルスなどの棒状、タバコモザイク病ウイルスなどの棒状、細菌ウイルスのおたまじやくし状などもある。化学的組成については核たんぱく質を主成分としており、もつともよく研究されているタバコモザイク病ウイルス（TMV）についてみると、分子量四〇〇万という高分子であり、六％のリボ核酸（RNA）と九四％のたんぱく質からなる。ふつう核酸としては、デオキシリボ核酸（DNA）またはRNAを含み、核酸はたんぱく質の殻に包まれている。この殻は多数の粒状たんぱく質の単位から組み立てられ、正二〇面体を基本とするものと螺旋状に核酸を包むものとがある。大形の動物ウイルスでは、その外側に外被をもち、外被はたんぱく質を主成分とし、多糖類や脂質を含む。ファージでは、核酸を含むたんぱく質の殻（頭）にたんぱく質でできた尾が結合し、おたまじやくし状になったものが多い。

ウイルスの遺伝的性質を決めているものは核酸で、ウイルスから核酸だけを抽出して適当な条件下で細胞に感染させると、効率は低下するがウイルスをつくることが可能であり、多くのウイルスについては示されている。また、消毒薬や熱に対しては細菌よりもやや抵抗力が強く、とくに乾燥・低温・グリセリンには抵抗がで、凍結乾燥・ドライアイス・五〇％グリセリン食塩水によってウイルスの活性が長く保存される。

【増殖】ウイルスを細胞外で培養できないのは、一般の生物と異なる物質代謝やエネルギー代謝に必要な装置をもっていないためである。それではどのような細胞内で増殖するのにか、大腸菌に感染・増殖する細菌ウイルスの一つ、T₂ファージについてまとめてみる。一九五三年アメリカのハーシー（A. D. Hershey）とチェイス（M. Chase）は、細菌にT₂ファージが吸着すると、ファージのDNAだけが細胞内に入り、たんぱく質は外に残って増殖には関与しないことを指摘した。この事実を「遺伝情報のにない手」がDNAであることの有力な証拠の一つとなつた。T₂ファージのDNAが細胞内にはいるとその細菌のRNA合成がすぐに停止し、代りにファージDNAを鋳型としたメッセンジャーRNAの合成が始まる。ファージ感染後、数分間でこのメッセンジャーRNAによってファージDNAの複製に必要な、いくつかの酵素たんぱく質が合成される。感染したファージのDNAを鋳型とする新しいファージDNAの複製は、感染後七分から始まる。一〇分前後経過すると、ファージ粒子を形成するたんぱく質の合成が始まり、すべての道具立てがそろると、一三十分ごろから完全なファージ粒子が出現する。感染からこれまでの一三十分間は細胞内に生きたファージがみられないので、かつては暗黒期とよばれていた。T₂ファージが感染した大腸菌一個当たり約一〇〇個の新しいファージが合成され、最後には菌が溶けて、ファージが培地中に放出される。動物ウイルスでは、細胞に吸着すると、ウイルス粒子が丸ごと細胞内に取り込まれ、細胞の中で外被が、たんぱく質の殻がはぎとられる。その後の増殖の仕組みは、ファージの場合と異なる点もあるが、大筋は同じであると考えてよい。また、RNAをもつウイル

ウイルス



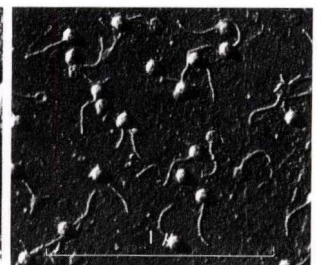
インフルエンザウイルス



イネの萎縮病ウイルス



タバコモザイクウイルス



バクテリオファージ

スの場合は、そのRNAを鋳型として新しいRNAの複製も、たんぱく質の合成もおこなわれる点が、DNAをもつウイルスの場合と異なる。

【生物か無生物か】ウイルスは発見以来、増殖と遺伝という生物特有の性質をもち、生物とみなして大きな矛盾もなかったが、タバコモザイク病ウイルスやポリオウイルスなどが結晶として取り出され、常識的にも無生物とみなされる一面が出現すると、果たして生物か無生物かという問題がおこった。これは、はっきりいわずに決めてしまおうというのが無理な話で、結晶ウイルスは感染能力をもつが、細胞に侵入しないかぎり増殖能力がなく生きた細胞に感染して感染能力を失うとともに増殖能力を発揮し、一定時間を経過したのちに感染能力をもったウイルスを細胞外に出すようになる。すなわち、結晶ウイルスは一時的な姿を示すもので、それが無生物的な性質であったからといって、ウイルスは無生物と切り切ることはできないわけである。

【ウイルスによる病気】伝染病の病原体としてその存在を見いだされたものであるから、ウイルスによる病気が種類が多く、感染の方

法や発病するまでの経緯なども千差万別である。動物ウィルスによる病気には、ヒトの咽頭結膜熱・インフルエンザ・日本脳炎・デング熱・流行性肝炎・はしか(麻疹)・おたふくかぜ(流行性耳下腺炎)・三日ばし(風疹)・トラコーマ(天然痘)・痘瘡・水ぼうそう(水痘)・ポリオ(小児麻痺)・第四性病・黄熱・オウム病などのほか、ブタの豚コレラ、ウシの牛痘、ウマの伝染性貧血、ニワトリのニューカッスル病、イヌのジステンパーや狂犬病などがあり、植物ウィルスによるものは、その病徴からモザイク病・萎縮病・縞葉枯病などの病名がつけられ、多くの種類の植物に発生する。

ヒトのウィルスによる病気についてみると、未感染者が患者に接すると一〇〇%発病するが、感染しても大部分は発病しないか、発病しても軽症ですむ日本脳炎、あるいは一度かかれば、ふたたびかかることのない(すなわち、免疫が残る)はしか、なん度でもかかるインフルエンザなど、ウィルスとヒトとの複雑な因子の組み合わせによって病気にいろいろの相違点が現われる。イヌのジステンパーがヒトに発病しないのは自然免疫で、ふつうにいわれる免疫は後天的なものをさす。これらのウィルスによる病気の治療については、ウィルスに特効薬が皆無(オウム病・トラコーマなどを除く大部分のウィルスによる病気には抗生物質も無効)であるところから、もっぱらワクチンや抗血清による予防接種に重点がおかれ、発病後は対症療法と合併症の予防をおこなうにすぎない。なお、ウィルスを分離したと固定したというのはウィルスを適当な実験動物に移植して代わり返していけるようになったことを示す。

「腫瘍ウィルス」腫瘍ウィルスともいい、アメリカの病理学者ラウス F. P. Rous が一九一〇年ニワトリのラウス肉腫を発見、その起因をウィルスと翌年発表して以来、腫瘍ウィルスが注目され、いろいろな動物に癌をつくるウィルスが発見されてきた。近年は純系動物の飼育技術をはじめ、組織培養法などの技術も進歩し、ヒトに感染するアデノウィルスが実験動物のハムスターに癌をつくることもわかってきた。しかし、感染細胞の癌化過

程がウィルスによって異なるほか、未解決の問題も多い。ヒトの癌についてはその存在を暗示するような事実はあるが、まだウィルスによる腫瘍は発見されておらず、まだウィルス説には決め手がないう。〈柳下徳雄・四宮知行〉
福見秀雄著『ウィルス』(九三・ダイヤモンド社)▽加地正郎著『ウィルス病の世界』(七三・日本放送出版協会)▽川喜田愛郎著『生物と無生物の間』(九六・岩波新書)ウィール・ステッチ wheel stitch 車輪(ウィール)に似た刺繍の刺し方。放射状の糸を中心から巻き上げ、放射線の糸をつなぎながら、糸をつぎつぎにすめていく。くも

の巣に似ているので、一名くもの巣がりと多い。〈田中千代〉
ウィルソン (Thomas) Woodrow Wilson (一八五六一一九三〇) アメリカ合衆国第二十八代大統領(在職一九一三～一九二〇)。バージニア州のスタウントンに生まれ、プリンストン大学・ハーバード大学、ついでジョンズ・ホプキンス大学大学院に法律・政治学を学び、一八八六年博士の学位を受けた。八八年コネチカット・ウェスレー大学の、九〇年プリンストン大学の教授となり、一九〇二年同大学総長に選ばれ、大学内の改革に努めた。一〇一年、民主党からニュージャージー州知事に推されて当選し、政界にはいった。一二年、民主党の大統領候補に推され、「新しい自由」New Freedom という革新政策を掲げて当選した。彼の自由主義的政策は、大資本に反対する大衆に支持され、懸案であった高関税の引下げ、中小企業を救済するための連邦準備銀行の設立、トラストの独占を制限する立法などがおこなわれた。彼の大統領就任後間もなく第一次世界大戦が勃発した。彼は中立を唱えて、一九一六年の大統領選挙では参戦しないことを約して再選されたが、大戦の開始とともに



アメリカの貿易と生産は活況を呈し、イギリス・フランスとの関係も密接となり、アメリカ

をへて、アメリカのヒューストンのライス研究所教授となり、その間、一時グラスゴー大学教授をも勤めた。二〇世紀初頭の物理学の一面面であつた電子の実験的研究で活躍した。電界であつた霧箱による素電荷の測定(一九一〇)では、ミリカの先駆となり、また、磁場内での誘電体の運動に関する実験では、当時対立していたヘルツ理論とローレンツ理論について後者の妥当性を示した。電離電流に関する研究、熱電子、真空放電、炎の電気的性質、塩類蒸気の電気伝導などの業績がある。〈藤村 淳〉
ウィルソン Edmund Wilson (一八六九～一九三九) アメリカの批評家。一九三一年「アクセセルの城」によって名声を確立した。フランス象徴派と、そのジョイス・T・S・エリオットなどへの影響を研究したものである。ほかに文芸批評としては『傷と弓』(一九二九)・『憂国の血』などがあるが、多才の人で『フィラードラ』・『アメリカの地震』などの社会批評、『イロコイ族への詫言』などのルポルタージュ、『ヘケット郡の思い出』などの創作、と多方面に活躍した。〈志村正雄〉
大貫三郎訳『アクセセルの城』(角川文庫)ウィルソン Angus Wilson (一九〇三～) イギリスの小説家。サセックスに生まれ、オックスフォード大学で中世史を専攻、卒業後大英博物館付属図書館に勤務。その間に短編集『悪い仲間』(一九三六)を発表し、市井の平凡な生活を鋭く風刺する特異な作風で注目され文壇に登場。一九五二年評論『エミール・ゾラ研究』を発表。ウルフなどに代表される二〇世紀小説の純粋化の傾向に反発し、人間と社会を総合的に描いた一九世紀自然主義の重厚な方法を再評価しようとする態度を明らかにしている。『毒にんじん』とその後日譚『(一九五二)』以来『アングロ・サクソンの態度』(一九五五)・『エリオット夫人の中年』(一九五五)などすぐれた長編小説によって、第二次世界大戦後のイギリス文壇に重要な地位を占めている。〈前川祐一〉

カ資本主義は戦争に利益を見いだすようになった。ウィルソンもこの圧力に抗し得ず、ドイツの無制限潜水艦作戦に対抗することによって一七年連合国側に立つて参戦した。「戦争を終わらせる戦争」で民主主義のための戦争」というスローガンで戦争にイデオロギー性を与えたウィルソンは、一八年一月、秘密外交の廃止や民族自決を唱える「十四か条」の講和原則を発表した。さらにパリ平和会議には指導的地位に立つて、国際連盟の創設に努めた。しかし、合衆国上院は国際連盟規約を含むベルサイユ条約の批准を拒否し、ウィルソン自身はこのころ健康を害し、二月三月任期を満了して引退した。彼の国際的活動に対して、一九一九年ノーベル平和賞が贈られた。〈斎藤 孝〉
ウィルソン Charles Thomson Rees Wilson (一八六九～一九五九) イギリスの物理学者。スコットランドのエジンバラに近いガレンコンに生まれた。マンチェスターのオーエンズ・カレッジおよびケンブリッジのシドニース・サセックス・カレッジで学んだ。キャベンディッシュ研究所ではJ・J・トムソンの研究生となり、一九二五～三四年、ケンブリッジ大学教授となる。最初は雲の発生の研究に着手し、水滴が荷電イオンを中心にして生ずるのを見いだし、トムソンのイオンの電荷測定成功をもたらし、この発見を利用して高速荷電粒子の飛跡を観測できる*ウィルソンの霧箱を製作した(一八七二)。その後この装置は原子核・宇宙線の研究に広く用いられ、大きな効用を発揮した。彼自身もX線・γ線の光子的なふるまいを調べ、またコンプトン散乱を実証して、一九二七年、コンプトンとともにノーベル物理学賞を受けた。そのほか鋭敏な金箔検電器を製作し、大気中に透過力の強い放射線が存在することを述べ、宇宙線の存在を暗示するなどのほか、雷雨の電気的構造に関する「ウィルソン説」もある。〈藤村 淳〉
ウィルソン Harold Albert Wilson (一九一三～) イギリスの物理学者。ヨークに生まれ、リーズ・ケンブリッジ・ベルリクの各大学に学び、ロンドンのキングズ・カレッジ、カナダのモントリオールのマギル大学教授

ウィルソン Harold Wilson (ハビー)

イギリスの政治家(労働党)。ヨークシャーの工場技術者の家に生まれる。オックスフォード大学に学び、二一歳で母校の経済学講師となる。第二次世界大戦中は、燃料動力省に勤務し、一九四五年労働党内閣議員となる。アトリー内閣の建設相政務次官・貿易相を歴任。四十七年に商務庁長官となったが、五一年同内閣の再軍備予算に反対して、ペバン労働党とともに辞職し、党内左派の一人として理論的指導にあたる。六三年労働党党首となり、翌年首相に就任したが、深刻な経済危機の中で、六七年一月、第二次世界大戦後、二度めのポンド切下げをおこなった。七〇年六月の選挙で敗退。七四年二月再度就任、七六年四月キャロハンにゆずる。

ウィルソン Colin Wilson (セー)

イギリスの評論家・小説家。レスターのくつ屋の子。一四歳のとき、科学知識を身につける目的で『科学便覧』六巻を書く。心理学・哲学を含む科学関係文献を図書館から借りて要約したものである。工業学校に学び、同校の実験助手、税務官吏・空軍勤務・土方などをへて、一九五〇年パリに遊び、舞踏家イザドラの兄レイモンド・ダンカンの行動主義哲学に影響される。一九五四年帰国、五六年評論『アウトサイダー』を発表。これは反既成社会的人間像の倫理的探求の試みだが、その内容および主張の激しさが、おりから台頭中の戦後派たち、いわゆる『アングリー・ヤングメン』の「怒り」を代弁するとして、一躍論壇の旗手となった。以来、小説『暗黒のまわり』(六六)、『ガラスの檻』(六六)、評論『宗教と反抗人』(六七)、『敗北の時代』(六八)など、小説・評論に精力的な活躍をつづけている。

中村保男訳『ガラスの檻』(六六・新潮社)

中村保男訳『宗教と反抗人』(六五・紀伊国屋書店)

ウィルソン Nancy Wilson (ハビー)

アメリカのジャズ系女性歌手。オハイオ州生まれ。一九五六年にラスティ・ブライアント楽団に参加。五八年に独立、翌年に出した初のLPでスターとしての地歩を築いた。黒人独特のフィーリングと豊かな表現力を持って

いる。

ウィルソン Wilson アメリカ、シカゴにあるウィルソン社のスポーツ用具。とくにゴルフ用具が有名で、プロからビギナー用まですべての種類がそろっていることに特色がある。日本向けとしての特別規格製品があり、舶来品でもっとも普及している。ハーゲン社の商標で売られている製品もある。同社は全米第三位の食肉会社で、スポーツ用具社としては第一位であり、一九六六年の総売上は九億九一〇〇万ドルである。

ウィルソン(山) Mount Wilson アメリカ合衆国カリフォルニア州の南部の山で、標高一七四〇呎。サンガブリエル山脈に属する海岸山脈の一部である。ロサンゼルス市の北東約二五の地点にあり、世界的に有名なパロマ・ウィルソン山天文台がある。ウィルソン山一帯は地中海式気候に属し、年間を通じて晴天が多く、天体観測に、年間を通じてロサンゼルスから近く、南にバサデナなど、ロサンゼルス市の衛星都市群が見え景色がよいので、日帰り客を対象とした観光地ともなっている。

ウィルソン(岬) Wilson's Promontory オーストラリア東南端、ビクトリア州南部にある岬でこの大陸の最南端に位置する。南緯三九度五分。このあたりは大陸東岸を南北に縦走するオーストラリアアルプス(大分水山脈の南部)がタスマニア島との間のバス海峡に消えるところに当たり、海岸線は複雑である。国立公園となっている。

ウィルソン山天文台 ————さんてんもんだい

アメリカのカリフォルニア州のウィルソン山にある天文台。一九〇四年に設立され、四八年からは近くのパロマ天文台と同一運営となっている。パロマ・ウィルソン山天文台

ウィルソン軟膏 ————なんこう 日本薬局方名は亜鉛華豚脂軟膏。亜鉛華二〇、安息香・五、乾燥硫酸ナトリウム四・五、豚脂七四の混合物。防腐剤・収斂剤・保護剤で、亜鉛華軟膏と同様であるが、その防腐性を強化したものである。

ウィルソン(霧箱) ————のきりばこ 放射線の飛跡を観察する装置。一八九七年ウィルソン C.T.R. Wilson によって考案され、一九一

一年発表されたのでこの名があるが、日本ではたんに霧箱といふことが多い。

ウィールデン Wealden イギリス南部、ウィールド地方に発達する陸成の下部白亜系。ロンドン盆地の南、サリ・サセックス・ケンなどの諸地方にまたがってほぼ東西に広がる地層で、主として淡水中(湖や川)に堆積した粘土・砂・砂岩・石灰質砂などからなる。この層は、その上に堆積していた海成の緑色砂岩や、ゴルト粘土層・白亜層などの浸食によって現われたもので、その続きはフランス北部やベルギーの一部にも広がっている。オニキオプシス・ラッフォルディア・ニルソニアなどの植物化石、ビバラス・ウニオなどの貝化石のほか、爬虫類のイグアナの化石を産するのでも知られている。日本の領石層群は、ほぼこの地層に対比されている。

ウィルデンブルッフ Ernst von Wildenbruch (一八五五—一九二〇) ドイツの劇作家。情熱的なパトスをたたえた壮麗な文体で、一時は青年層の心を魅了した。自然主義直前の沈滞した演劇界に新風を送りこむことになった悲劇『カローリン・ガウ』(一八八七)で一躍名声を博した。一九世紀末のドイツ帝国の興隆期の最中において、『ハインリヒとその一族』(一九〇三)その他の史劇を制作し、愛国的心情を吐露した。

ウィルトシュピッツェ Wildspitze オーストリアのチロル州と、イタリアとの国境にたつたエッツタール・アルプス(エッツタールアルプス)の最高峰。オーストリア側のフェント山塊に属し、標高三七四四呎。主として片麻岩・結晶片岩からなり、北および西斜面には氷河が発達している。東麓のフェントが登山の根拠地。

ウィルヘルム・フイルヘルム

ウィルヘルム Ludw. Ferdinand Wilhelm (一八三三—一九一六) ドイツの物理化学者。一八四九—五四年ハイデルベルク大学講師。以後ベルリンで青年物理学者のサークルにはいり、ヘルムホルツと交際し在野の学者となった。本来は物理学者で、熱伝導・放射熱・表面張力の数学的研究にたぐくみ、化学反応速度の数式化に成功した。偏光計を用いて蔗

糖の加水分解の際の反応速度を測定し、五〇年には「蔗糖に対する酸の作用が起る法則について」を公表し、反応速度論の先駆となったが、八四年オストワルト(父)が注意を喚起するまでほとんど認められなかった。

ウィルヘルム August Daniel Ferdinand Victor Wilhelmy (一八五五—一九一六) ドイツのバイオリン奏者で、作曲家や教師としても活動した。バイオリン用の編曲もあり、シェーベルトの『アペッマリア』とパッハの管絃楽組曲第三番からの『G線上のアリア』の二曲は今日でも好んで演奏される。

ウィルヘルミナ(山) Wilhelmina インドネシア、イリアンジャヤ(ニューギニア島)の高峰トリコラ山の旧称。トリコラ(山)ウィルヘルム(一世) Wilhelmina I (一九〇一—一九六二) プロイセン国王(在位一八八八—一九一八)の長女(在位一八八八—一九一八)。生粋の武人となり、一八八八年三月革命のとき反動派の中心とみなされ、一時ロンドンにのめられた。五八年兄王病氣のため摂政、六一年即位とともにドイツ制覇のためのプロイセン軍国化の宿志を実行に移した。すなわちローンを陸相、モルトケを参謀総長に任じて軍備の強化をはかったが、予算問題で下院と衝突するや、ピスマルクを首相に登用(一八八七)、その鉄血政策により強大な陸軍をつくりあげた。そうしてオーストリアを破って(一八六六)、北ドイツ連邦を組織し、ついでプロイセン・フランク戦争(一八七〇—七二)に大勝を収め、一月一八日ベルサイユ宮殿においてドイツ皇帝即位式をあげた。血縁関係からロシアと親しく、ために同盟を仮装敵国とするピスマルクのドイツ・オーストリア同盟政策に反対したこともあるが、帝国の内政や外交政策はほとんどいっさいピスマルクを信任してその手腕にまか

せた。

ウィルヘルム August Daniel Ferdinand Victor Wilhelmy (一八五五—一九一六) ドイツのバイオリン奏者で、作曲家や教師としても活動した。バイオリン用の編曲もあり、シェーベルトの『アペッマリア』とパッハの管絃楽組曲第三番からの『G線上のアリア』の二曲は今日でも好んで演奏される。



参謀総長に任じて軍備の強化をはかったが、予算問題で下院と衝突するや、ピスマルクを首相に登用(一八八七)、その鉄血政策により強大な陸軍をつくりあげた。そうしてオーストリアを破って(一八六六)、北ドイツ連邦を組織し、ついでプロイセン・フランク戦争(一八七〇—七二)に大勝を収め、一月一八日ベルサイユ宮殿においてドイツ皇帝即位式をあげた。血縁関係からロシアと親しく、ために同盟を仮装敵国とするピスマルクのドイツ・オーストリア同盟政策に反対したこともあるが、帝国の内政や外交政策はほとんどいっさいピスマルクを信任してその手腕にまか

せた。